ドラえもん のび太の幻想冒険記

BLACK(黒)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は

とある小学生とネコ型ロボットが体験した

広大な世界のお話…

時間旅行に向かった彼らだったが、辿り着いた場所は…幻想郷!?

妖怪、幽霊、それに神様!?

外界から忘れ去られたこの場所に、果たして彼らの結末は！

目次

始まりの時
第1話　日常…？　―――　1
第2話　時の迷子　―――　11
第3話　幻想郷　―――　21
第4話　これまでの経緯　―　39
第5話　幻想郷での戦闘　―　66
第6話　里の絆　―――　86
第7話　青狸異変　―――　100
第8話　文々。新聞　―――　122
第8話　外伝＃1　寺子屋
139
第8話　外伝＃2　一時限目国語
そしてラクえもんズ!?　―――　152
第9話　内装がないそうです
171
1章　紅霧異変
第10話　紅い霧　―――　195
第11話　紅魔郷　―――　220

始まりの時

第1話　日常…？

「ドラえもお～～ん!!」
その大きな声が家中に響き渡る
？「ドラえもん！　大変なんだよう!!　実は」
その後話を続けようとするが、青いタヌキのロボットは間髪入れずに答えを言った
ドラえもん「わかってるよのび太くん
今日テストの答案が返ってきていつもの如く0点」
のび太「え、うん」
ドラえもん「帰りにジャイアン達と野球をして一球も打てず、エラーしっぱなし
ジャイアンとスネ夫に殴られた」
のび太「そう」
ドラえもん「そして家に帰ると待ち構えてたママにテストの答案を見られて叱られたんだろ？」
今日の出来事全て見てたかのようにスラスラと答えが返ってくる

のび太が「何で分かったの?」と聞くと、「いつもの事だから嫌でも分かるよ」と返ってきた

少し涙目の冴えないメガネの男の子の名前は野比　のび太

小学5年生で、趣味は昼寝

勉強、運動全てダメダメで何かあると、いつもドラえもんに頼ってしまう

呆れた顔の青いタヌキのような生き物（?）はドラえもん

未来からきたネコ型ロボットだ

ネコ型ロボットの割にネコ耳が無いが猫と話す事ができる

自分をタヌキと間違えられるのが嫌いだが、その容姿から「青いタヌキ」と呼ばれる事が多い

のび太「ねぇ、身体とケンカと勉強に強くなる道具出してよう!!」

ドラえもん「そんなの無いに決まってるだろ　　運動して勉強頑張ればいいじゃないか」

のび太「え～!?やだよ、面倒臭い」

いつものやりとりが続くその頃、空き地では…

？「全くのび太のやつ、いつになったら野球上手くなるんだよ
なあ!?スネ夫」
スネ夫「ホントにそうだよ　　でもジャイアン、のび太が野球上手くなるなんて、1年や2年かかっても無理な気がするよ」
？「あら、のび太さんだって頑張ってたじゃない
今日はのび太さんの方にボールが結構来てたから相当苦労したと思うわ」
ジャイアン「でも取らないと意味がねぇんだよ　　そのせいで大差で負けたんだぞ!うちのジャイアンズは」
そう鼻を鳴らし怒りを露わにしてる身体が大きな男の子はジャイアンこと、剛田　武（ごうだ　たけし）
その体つきからして、ケンカには強く人の物は自分の物と、欲張りで傲慢な性格
その隣でジャイアンを怒らせないようにしてるトンガリ頭の男の子は骨川　スネ夫
見栄っ張りで嫌味な性格　骨川出版の御曹司であり、お金持ち
その所為か、のび太達にはよく自慢話をする
ジャイアン達を宥めている女の子は源　静香（みなもと　しずか）
優しく、仲間想いな性格　皆のヒロイン的存在
お風呂好きであり、学校から帰るとすぐに入るという綺麗好き

その所為か、よくのび太達に覗かれる（決して故意ではない）
この三人はのび太と同じクラスメイトで友達だ
スネ夫「そ、そんな事より皆、明日のび太の家に行くんだろ?」
静香「ええ　　もちろんよ」
ジャイアン「あんな楽しそうな所に二人だけで行かせるかよ!」

時間は遡り学校のお昼休み…

のび太「ねぇみんな!明日の朝、ドラえもんと　空想サファリパーク　に行くんだけど、みんなも一緒にいく?」
スネ夫「空想サファリパークって、いつか行ったユニコーンに会いに行った未来のサファリパークでしょ?
何しに行くの?」
のび太「実はね?久しぶりに〝ペガ〟と〝ドラコ〟と〝グリ〟に会いに行こうと思って!」
静香「まぁ!あの３匹と久しぶりに!?」
ジャイアン「俺はもちろん行くぜ!お前も行くよな!?スネ夫」

スネ夫「あ、うん、ボクもいくよ　　久しぶりだなぁ　　いつ以来だっけ？」

空想サファリパーク
それは現実世界では実在しない生き物が住んでいるいわば動物園
たとえばユニコーン、人魚、ピクシーなどその他諸々
伝説の生き物ですらそのパークで生きて、暮らしている
のび太がいった3匹の生き物も、実在しない生き物で
〝ペガ〟はペガサス　　〝ドラコ〟はドラゴン　　〝グリ〟はグリフォン
その3匹は以前、ドラえもん達と時間旅行をし、過去の日本でのび太がペットを作るため、動物の遺伝子アンプルとクローニングエッグというひみつ道具を使って作られた生き物
ペガは馬と白鳥、ドラコはワニと鹿とトカゲ、グリはワシとライオンのアンプルで作られた
過去の日本、いや世界を自分の物にしようとした悪の親玉「ギガゾンビ」と共に戦い、そしてタイムパトロールと共に空想サファリパークに行き、そこで暮らしている
今回久しぶりにその3匹に顔を出してあげようと思い、それならジャイアン達も誘お

うと思い今に至る訳だ
ジャイアン「よし!それじゃ明日の朝１０時にのび太の家に集合だ!!
…のび太、学校が終わったら野球だ　　お前も来いよ」
スネ夫「エラーしたら承知しないぞ!」
のび太「う…うん」

その日の夜

のび太「明日はペガ達に会える!いやあ、今日は眠れるかなあ?」
ドラえもん「全く…君は調子いいね」
のび太「えへへ…」
わくわくして興奮気味ののび太だが、時刻は午後１１時
早く寝ないと朝起きられなくなるので、無理に布団に入る
しかし、妙に視線を感じる感覚がする
のび太はふと、周りを見渡した
ドラえもんは押入れの中

道具の整理をしているようで、ふすまは空いていない
ではさっきのは一体…？
気のせいかと思ったのび太は布団に入るや否や、約３秒で深い眠りについた

？「ふふふ…面白い人を見つけたわ…」

翌日
時間通りにきたジャイアン達はさっそくドラえもんに
「おい！早く行こうぜ!!」と急かした
ドラえもん「待ってよジャイアン　　先ずはタイムマシンで２２世紀に行くよ？」
スネ夫「え？どうして２２世紀に？」
ドラえもん「みんなで空想サファリパークに行くには大型の乗り物で行かないと…
前みたいにスネ夫が二人用の乗り物で無理矢理三人で行ってたからパークの園長さんから注意されたからね」
スネ夫「あ…あははは」
ジャイアン「全く…じゃ、とっとと行こうぜ!!」

ドラえもん「うん！じゃあみんな　　タイムマシンへ！」
そう言って、ドラえもんはのび太の机の引き出しを開けた
タイム空間は机の引き出しに繋がっているので、時間旅行する時はいつものように引き出しの中に入る形でタイムマシンに乗る
そして、順調に進んで行く…と思われたが、ここで異常事態が発生する

タイムマシン「時空乱流ガ発生シマシタ　時空乱流ガ発生シマシタ　スピード全開デ抜ケ出シマス　　捕マッテクダサイ」
ドラえもん「!?まずい　　みんな　捕まって!!」
そう言うと、タイムマシンの後ろの部分からロケットの様な物が出てきて、突如スピードが上がる
みんなは振り落とされない様にタイムマシンにしがみつく
タイム空間に落とされると、時間も場所も不明な場所に落とされ帰る事ができないからだ
そうならない為にもタイムパトロールが存在しているが、全てが全て見つかる訳ではない
必死にしがみつくのび太達だが、

タイムマシン「ガ…ガガガ…ピー　ザー…」
何と、タイムマシンの音声装置が壊れてしまった
それだけではない　メーターにも不具合が生じ、エンジンにも異常が出た
予備エンジンがあるので、抜け出せるかと思われたのだが
ジャイアン「おい…何だよ、アレは!!」
ジャイアンが指を指したのは、タイム空間の外だ
本来タイム空間の外には、時計の絵があるのだが時計ではなく、代わりに目の様な物が至る所についていた
突如強力な引力によって、タイムマシンは引き寄せられる
静香「ねぇ!このままだと吸い込まれてしまうわ!」
のび太「どうするんだよドラえもん!」
ドラえもん「だ…駄目だ　コントロールが効かない!このままじゃ…」
その時、強い衝撃と共にタイムマシンが謎の空間に引き込まれた

うわあぁぁぁぁ!!

のび太「う…うーん…」
のび太は目を覚ました
今まで気を失っていたようだ
のび太「ここは…森?」

第2話　時の迷子

のび太「ここは…森？」
気が付いた場所はのび太が見慣れた未来都市ではなく、草木が生い茂る森
のび太「…はっ！みんなは!!」
辺りを見渡したら、煙が出て壊れているタイムマシン
それに、倒れているみんなの姿があった
のび太「みんな!!大丈夫!?」

幸いにもみんなは気を失っただけで怪我をしてはいなかった
静香「それにしても、ここはどこなの？」
スネ夫「見た所森みたいにだけど…ここって空想サファリパークじゃないよね？」
ジャイアン「おい！ドラえもんここはどこなんだよ！」
ドラえもん「まって！今調べてみるから…!?」
ドラえもんは時空探査機を使ってこの時代と場所を調べようとしたが、

ドラえもん「計測不能だって…!?」
のび太「どうしたの？ドラえもん」
ドラえもん「そ…そんな事はないはず、もう一度他の方法で」
のび太「…？」
ジャイアン「おーいのび太ぁ！こっちに来いよ！こっちに家があるぜ！」
スネ夫「もしかしたら人がいるかもしれない！　　ここがどこか聞いてみよう！」

ジャイアン達が見つけたのは青い屋根の洋館だった
静香「立派なお家…ここなら誰かいるのかもしれないわ！」
スネ夫「でもおかしいよ　　もしここが２２世紀、もしくは空想サファリパークだったらこんな家なんてないはずだよ
もし時代が変わらなかったとしてもこんな森の中に家があって尚且つ電波塔もないなんて…なんかおかしいと思わないかい？」
ジャイアン「もしかしたら山奥に飛ばされただけかもしれないぜ？」
静香「少なくとも、ここに人がいた事はわかるわ
だって、煙突をみて　　煙が…」
ジャイアン「な！ほら、とっとと行くぞ！のび太も早く来いっ！」

のび太「う、うん！」
４人はドラえもんを残し、森の中にある洋館の玄関に向かった

コンコン

静香「すみません！誰かいらっしゃいますか？」
スネ夫「ホントに誰かいるのかなぁ？」

ガチャッ
スネ夫「ホントにいたあ!!!」
ジャイアン「うるせぇ!!（ガツン）」
びっくりするスネ夫にげんこつを食らわせるジャイアン
中から出てきたのは、１人の少女だった（のび太達からするとお姉さんになるかもｗ）
黄色のショートヘアで赤い髪飾り（？）をして、服は青い半袖のリボンを付けた不思議な服だった

？「あら、見かけない人ね　　もしかして、外来人？」
【外来人】という聞き慣れない単語が出たが、気にせずのび太は質問した
のび太「あの、すみません　　僕たち２１世紀からタイムマシンで来たんです
ここは西暦何年でここはどこですか？」
すると、スネ夫がこう突っ込んだ
スネ夫「おいバカ　　もしここが２２世紀とかじゃなかったらお前が何言ってるかわかんないだろ！
そもそもタイムマシンなんて僕たちの時代には存在して…」
スネ夫達の言葉に首を傾げる少女
？「ごめんなさい、君たちの言っている事は私はわからないけど、あなた達は間違いなく、【外来人】ね」
またもや【外来人】という言葉を口にした
わからなかったので、しずかは質問した
静香「すみません…あの、あなたが言っている【外来人】とは…？」
？「ああ、そうね　　【外来人】というのは、【外の世界から来た人】という意味よ」
その言葉を聞いて、４人は混乱した
外の世界？この人は何を知っているんだ？

ここは一体…
？「取り敢えず中に上がって頂戴　　私はアリス
アリス・マーガトロイドよ」
スネ夫（このひと、海外の人かなあ？でもその割に日本語がペラペラだし…）

疑問を残して、４人は自己紹介をした
のび太「あ、待ってください！もう一人いるんです
おーい、ドラえもーん！」
その声をきいたドラえもんはこちらに走ってきた

焦った様な顔をして

ドラえもん「み、みんな、大変だ！ここは…この世界は」
その時、ドラえもんの姿をみたアリスはびっくりして
アリス「きゃ!?青いタヌキが喋った！」
すると青い頭が少し赤くなり
ドラえもん「タヌキじゃない!!僕はネコ形ロボットだい!!」

のび太達は、あぁ　　また始まった　　と呆れ顔
のび太「まぁまぁ…それよりどうしたの？なんだか慌ててたみたいだけど…」
ドラえもん「…は!?そうだった！みんな！この世界の事がわかったよ！」
唐突にでた【世界】という単語
４人はそこまで事態が深刻だと気付いていなかったが、ドラえもんの焦り様をみて、大変な事だと気付く
アリス「とにかく、みんな上がって　　お茶出してあげるから一旦落ち着きましょう？」
５人は頷き、お邪魔します、と一言いってアリスの洋館に入っていった

中には同じ姿をした人形が沢山あり、のび太達は若干不気味がっていた
…一人を除いて
静香「わあ！可愛いお人形さん！」
しずかは一つの人形を手に持った
しずかは人形やぬいぐるみが大好きで、以前人形の彼氏をドラえもんと探した事もある

すると、手に持った人形が急に動きだし、宙に浮かんだのだ
のび太「わ！人形が空を飛んだ!!」
ジャイアン「すげぇ…何かのマジックか？」
驚いたが、人形好きな少女は
静香「すごいわ！あなた動く事ができるのね！」
と驚きながらも目を輝かせながらすごいと賞賛した
これにはのび太達も「こんなしずちゃん見た事ない」と苦笑い
アリス「さぁ、お茶が入ったわ　　どうぞ」
人形がテーブルにティーカップを6つ並べた
のび太「あの…これって全て」
アリス「ええ、全て私の人形がしたのよ」
スネ夫「ええ!?これってマジックじゃないんですか!?」
アリス「うーん　　マジックというか、人形を操っているだけなんだけどね　魔力の糸を使って」
スネ夫「魔力!?アリスさんは魔法が使えるんですか!?」
アリス「えぇそうよ、でも私だけじゃないわ
この世界の人も使う事が出来るわ　　全員が全員じゃないけれど」

その言葉を聞いて驚いた
この世界は魔法が使える人がいる
その言葉を聞いて、のび太は
の（なんだか美夜子さんがいた世界を思い出させるなぁ）

のび太は美夜子という人と共に魔界へ行き、魔王デマオンを倒した
…倒したのはジャイアンだけどね

ドラえもん「それじゃあ話を戻すけど…色々調べたんだけど、どうやらここは僕たちがいた世界じゃない
別の世界に僕たちは迷い込んだんだ」
のび太「…え？どういう事？この世界ってどういう事？」
ドラえもん「さっき時空探査機を使ったんだけど無反応だったんだ
もちろん故障じゃないよ！故障なら電源がつかない様になるんだけど、時代が表示されないんだ、それに座標まで…
こんなの見た事がなかったよ」

スネ夫「確かに…座標がわからないなら磁場に影響を受けてる可能性もあるけど、時代がわからないってなんかおかしいよね…」
ドラえもん「次にドラミに連絡を取ろうとタイムテレビを使ったんだけど、砂嵐のまま、使えないんだ…」
ジャイアン「おい！それじゃ俺たち帰れないじゃねぇか!!」
ドラえもんはその言葉を聞き、ビクッとした
帰れないかもしれない事は沢山あったが、タイムパトロールに助けてもらったり、過去から奇跡的にタイムマシンを使わず帰る事もできた
しかし、今は次元が違う
場所も、時代も、さらにタイムマシンも使う事が出来ない
タイムテレビも使う事も出来ないという事は、時間に関するものはほぼ使えなくなり、救援を送る事も出来ないという事だ

アリスは頭の上に?を出して聞いてきた
アリス「あの…さっきいったタイムマシン?と時空なんとかって一体…」
静香「それはドラちゃんのひみつ道具です」

そんな未知の道具を使うこの子達は一体…

しばらく無言になっていたが、スネ夫はアリスに聞いた

スネ夫「あの…アリスさん　　さっき僕たちの事を外来人といっていた事ですが…」

アリス「ええ、そうだったわね　　それでは説明しましょうか

まずこの世界の事をお話ししましょうか」

お願いしますとドラえもんが言った

不安な５人が迷い込んだんだこの世界

アリス「ここは【幻想郷】外の世界から忘れ去られた楽園よ」

第3話　幻想郷

幻想郷　　それは結界を隔て、現代の裏にひっそりと存在するもう一つの世界
そこには人間と、それ以外に妖精、妖怪、神などが平和に暮らす事が出来る理想郷

アリスは幻想郷について簡単に纏めて話した
外の世界から忘れ去られた楽園
そこには人間だけではなく、多種多様な種族の生物がいる事
そこに迷い込んだんだ人間の事を外来人という
アリスの口から告げられた事実にのび太達は戸惑った
スネ夫「それじゃあどうするんだよ…！タイムマシンも使えない　　通信手段は途絶えたこの状況で、僕たち帰る事出来るの!?」
スネ夫のこの言葉にドラえもんはただ黙って見てる事しか出来なかった
ジャイアン「ふざけんじゃねぇよ！おいドラえもん、なんとかしろよ!!」
スネ夫「ここに連れて来たのび太とドラえもんの責任だっ！どうしてくれるんだよ！」

その言葉にしずかは反論した
静香「ちょっと待って！のび太さんとドラちゃんは何も悪くないわ！私たちが、一緒に行くって言ったことだし…
　それにタイムマシンでのトラブルでこうなった訳だから…」
その言葉に二人は反発する事は出来なかった
のび太「で、でもさ　　タイムマシンが直ったらまた元の時代に帰れるんじゃないの？」
スネ夫「のび太、お前さっきの話聞いてたのか？時空探査機もタイムテレビも使えなかったんだぞ？直ったとしても使える訳ないだろ！」
のび太「そ…それじゃあ僕たちはもう…」

絶望の中で、アリスは手を差し伸べた
アリス「そんなに落ち込まないで！もう帰れないなんてことはないわ」
ドラえもん「それは、帰る方法があるという意味ですか？」
アリス「ええ、もちろんよ」
その言葉にのび太達は明るい顔に戻った
ジャイアン「ほ、本当か!?どうやって戻るんだよねぇちゃん！」

アリス「（ねぇちゃん…）それは霊夢…、博麗の巫女に頼む事よ」
みんな「博麗の巫女？」
元の世界に帰る方法で、何故巫女の名前が？
疑問に思ったが、帰る事が出来るなら手段は問わなかった
アリス「みんな今すぐにでも帰りたそうね…わかったわ　私が霊夢の所へ連れてってあげる」
のび太「本当ですか!?」
静香「でも、いいんですか？見ず知らずの人にここまで親切にして下さって…」
アリス「いいの　気にしないで！迷った外来人を助ける事は好きでやってるし、それに…」
スネ夫「それに？」
すると、アリスは自分の作った上海人形を持ち、
アリス「私が作ったこの人形を目を輝かせて可愛いって言ってくれて嬉しかったの　はい」
静香「…え？」
アリスは上海人形をしずかに渡した
アリス「これは私からの贈り物　あなたなら大切にしてくれると思うわ　受

け取ってくれるかしら?」
突然のプレゼントに驚いたが、しずかは満面の笑みを浮かべて
静香「あ、ありがとうございます!　　絶対に大切にします!」
それを見て微笑んだアリスはのび太達に、「いいお友達ね」と言われて、一同は大きく頷いた

片付けを済ませた後、アリスは真剣な顔でのび太達にこう告げた
アリス「いい?絶対に離れちゃダメよ?　　森の中には凶悪な妖怪がいるから、決して迷子になってはいけないの　　命が失う事もあるから、いい?」

のび太達はこの言葉は決して脅しではない事は分かっていた
アリスが使った魔法、そして幻想郷の世界の話
ここは自分達が知っている常識から大きく外れた世界なのだ
一同は洋館をでて、博麗の巫女がいるという【博麗神社】へと向かった

今進んでいる場所は森の中でも道が整備されている場所で、そこを歩いて行くと博麗

神社に着くという
のび太達は談笑をしながら先を進む
すると
？「ようアリスー！そいつらは誰だー？」
誰だろうと思い、後ろを振り向く
しかし誰もいない
いや、いた
振り向いた場所から見上げた所に、箒に跨って飛んでいる黒いトンガリ帽子を被った少女が
アリス「魔理沙じゃない　この子達は外来人で、いまから博麗神社に行く所よ」
魔理沙「なんだ、やっぱり外来人だったか　　お！この青いのって、どっかの本で見た海坊主か!?」
海坊主とドラえもんを比較したのび太達は笑いを堪えてドラえもんの方をみた
ドラえもん「誰が海坊主だ！僕はネコ型ロボットだい！」
アリスと同じやりとりをしていた所を見ていたアリスは、「ドラえもんも大変だなぁ」と同情していた
魔理沙「お前ロボットなのか!?凄いなぁ！なぁちょっと見せてくれよ」

そういうとドラえもんに近づき、ヒゲを引っ張ったり口を手で開いて覗いたりした
魔理沙「へ～　　ネコ型ロボットって言ってる割にはネコに見える所はヒゲくらいだなぁ
あと、手が団子みたいだし足短いし、よくこんなので生活できるよな！」
と、ボロクソに言われる始末
少々涙目のドラえもんが可哀想になったのび太は、魔理沙に向かって「でも、僕達の大切な親友なんです　　あまり悪く言わないで下さい」とフォローした
その言葉を聞いた魔理沙はドラえもんを見て、少し反省した
魔理沙「あー、えーっと…悪かったな　　悪気があってやったわけじゃないんだよ」
アリス「どの口がいうんだか　　あなたの日頃の行いを見れば悪気が無いなんて嘘に決まってるわ」
魔理沙「人聞きの悪い事言うなよ～」
静香「あの…あなたは？」
魔理沙「あぁ、自己紹介が遅れたな　　私は霧雨　魔理沙　　ただの魔法使いだ」
見た目からして魔法使いというのはわかる
現に空を飛んでいたからだ　　それも漫画やアニメで見たまんま箒で飛ぶ姿

一同の自己紹介は割愛（ボクドラえもん）

魔理沙「お前ら、霊夢の所に行くんだろ？私もついて行くぜ！」
のび太「え？魔理沙さんもですか？」
アリス「まぁ魔理沙が霊夢の所に行くことはわかってたけどね…　まぁいいわ
　魔理沙、付いてくるならこの子達を守りなさいよ」
魔理沙「もちろんだぜ！私に任せてくれ！
…なぁ、これ思ったんだけどさ」
スネ夫「え？なんですか？」
魔理沙「これ
飛んでった方が早く無いか？」

少し沈黙して、アリスが呆れ顔で
アリス「あんたバカでしょ？外から来た人間が魔理沙みたいに普通に空飛べると思っているの？」
そう言われた魔理沙は「あ、確かに」と照れながら笑ったが、

ドラえもん「確かに！すっかり忘れてたよ」
ジャイアン「こんな時に忘れてたとはな　　ドラえもんはホントバカだぜ！」
スネ夫「それ、ジャイアンが言えた事じゃないと思うけど…」
ジャイアン「なんだと!?もういっぺん言ってみろ!!」
スネ夫「わあ！ゴメン！冗談だってば!!」

そのやりとりをみたアリスと魔理沙は不思議そうに見ていた
アリス「えっと…もしかして貴方達飛べるの？」
のび太「はい！ドラえもん！」
ドラえもん「うん、わかってるよ！」
ドラえもんはお腹にあるポケットに手を突っ込んで、軽快な音楽と共に取り出したのは

テッテレー！

ド「タケコプター！」

それは昔の子供が遊んだ事があるであろう「竹トンボ」に似た道具だった
魔理沙は興味津々で目が子供のように輝いていた
珍しいものが好きなのだろう
アリス「こんな小さいので空を飛ぶことが出来るの？」
のび太は飛べることを見せようと、タケコプターを頭につけ、スイッチを入れた
羽が回転するとのび太の体が宙に浮かび、自由に飛んで見せた
これにはアリスと魔理沙は驚いた
外来人で、能力もなさそうな子供が自由に空をとんだからだ
アリス「凄い…」
魔理沙「すげえ！なぁ私にも使わせてくれよ！」
アリス「あなたはその箒があるでしょ？それで我慢しなさい　どうせ借りたら返さないんだから」
魔理沙「おいおい、人聞きの悪いことというなよな
そんなこと言って本当は自分も使いたいんだろ？」
アリス「そ、それは…」
それを聞いたドラえもんは

ドラえもん「はい　　これを頭につけて、このスイッチを押すんですよ」
アリスにタケコプターを渡して使い方を教えた
スイッチをおすと空に浮き上がった
最初はコントロールが難しかったのだが、これでも空を飛ぶことが出来ていたのですぐに慣れた
アリス「本当に凄いわ…！ドラえもんさんは凄い物を持ってるんですね」
ドラえもん「いやぁ、それほどでも…（照」

一同は空を飛び、森を越え、湖を越え、博麗神社へ向かった

ここは博麗神社　　神社の縁側でお茶を飲み、煎餅を食べている少女がいた
？「はぁ…　今日はいい天気ね」
お茶を飲み、そう呟いたその時…

？「ん？あれは…魔理沙じゃない」
魔理沙「おーい、霊夢～　　遊びに来たぜ！」
霊夢「なによ、どうせまたお茶とお菓子目当てに来たんでしょ？あんたにあげるものはないわよ」
魔理沙「そんなこというなよ～
…とそれは置いといて…霊夢！仕事だぞ」
霊夢「はあ？仕事？あんたまた厄介事を持って来たんじゃないんでしょうねぇ」
魔理沙「今回は私じゃないぜ　　アリスが外来人を連れて来たんだよ」
霊夢「アリスが？」
魔理沙「お、来たぜ」
そう言うと魔理沙は鳥居の方に指を指した
霊夢はその方向をみると、空を飛んでこっちに来るアリス達が見えた
アリス「もう、魔理沙ったらいきなり飛ばして…付いてくるとか、守ってやるとか言ってたくせにやっぱりこれよ…」
スピードを上げていった魔理沙に追いつこうとしたが、タケコプターにはかなわず、必死に追いかける羽目になったと言うわけだ

スネ夫「魔理沙さんホント早いね　　流石魔法使いだ」
ジャイアン「すげえなぁ…俺も魔法使いになって見たいぜ」

（ジャイアンが魔法使い…？）

のび太達は魔理沙を見た後だったので、魔理沙の服装をしたジャイアンを想像してしまうが笑いを堪える
見ていた霊夢は恐る恐るアリスに質問する
霊夢「アリス…その外来人って能力者？」
アリス「いいえ、普通の人間とネコ型ロボットよ」
霊夢「???」
霊夢はドラえもんを見て、ネコ？これが？と思ったが、ドラえもんはそれを察したのか、「耳は無くてもネコ型ロボットです」と答えてきたので、納得するしかなかった
霊夢「まあ詳しい話は後で中で聞くわ　　私は博麗　霊夢　　楽園の素敵な巫女とは私のことよ？」

突っ込むべきかわからなかったので、敢えて突っ込まずに自己紹介をした
のび太「野比　のび太です」
ジャイアン「剛田　武だ　　みんなからはジャイアンって呼ばれてるぜ！」
スネ夫「骨川　スネ夫です」
静香「源　静香です」
そして最後に

ド「ぼくドラえもん」

自己紹介を済ませて中に入ろうとすると、賽銭箱に目をやった
中は自分が見てきた中で一番少なかった
それを見ていた事に気付いた霊夢は「素敵なお賽銭箱はそこよ」と、賽銭箱に指を指した
アリスと魔理沙は、「なにも子供に集（たか）らなくても…」
そう思ったが、スネ夫は

スネ夫（なんだか可哀想になってきたなぁ　　今から帰らせてくれるかもしれないから…）
そう思ったスネ夫は自分の財布から千円札を出し、賽銭箱に入れた
すると

シュッ

霊夢が残像が見える程凄い速さで賽銭箱の前に来た
そして驚いた
霊夢「え!?千円札!?こんなにいいの!?」
まさか子供から千円札が出てくるとは思っていなかったようでびっくりしていた
スネ夫「ええ、いいですよ　　この世界から帰れるなら千円なんて安いものですよ」

一度でも言ってみたい
のび太はそう思った　　流石お金持ち
霊夢「ありがとう！ささ、入って入って！」
お賽銭を入れたら急に印象が変わった所をみると、この人お金に困ってたのかな？

そう思わずにいられなかった…

気前よくお茶と茶菓子を出して来てくれたが、それを目もくれずのび太は霊夢に話を切り出した

のび太「あの、僕たちは元の世界に帰れるためにここに来たんです」

霊夢「ええ、アリスから聞いたわ　　あなた達、運が良かったわね　　アリスの家の近くに落とされて」

スネ夫「と言うと？」

霊夢「魔法の森には妖怪はもちろん、そこに生えているキノコが厄介なのよ」

静香「キノコ？…何か胞子が出ていて危険とかそう言うのですか？」

霊夢「よくわかったわね　　そのキノコから人体に危険な胞子が出ていて、吸い込むと体が麻痺したり最悪の場合は死に至ることもあるのよ」

魔理沙「でもキノコが生えてるといっても全ての森にって言うわけじゃないんだ

アリスの家近辺や道とかは生えてないんだ　　そこに人間も通る時もあるからな」

アリス「まぁ魔理沙はキノコ目当てに森を飛び回っているから生えてない場所で人が倒れてたら魔理沙の所為になるけどね」

魔理沙「おい、そりゃないぜ」
冗談（？）も飛んで和やかな雰囲気だったが、本題に戻った
霊夢「確かに私は結界を開いてあなた達を元の世界に帰す事はできるわ　　でも…今すぐは無理ね」
ドラえもん「どう言う事ですか？」
霊夢「実は昨日結界の異変が起きて、結界の修復をしたのよ　　直したばかりだからあまり結界を弄る事が出来ないの」
静香「え？それじゃあ私達帰る事は出来ないの？」
霊夢「結界が完全に修復すればいつでも開いてあなた達を元の世界にって出来るんだけど、それが出来るようになるには１年かそれ以上待ってもらうしか…」

のび太達は言葉を失った
一年もここにいなければいけないのか？学校はどうなるのか…家族が心配しないのか…
色んな事を考えてしまう
ジャイアン「まぁ絶対に帰れない訳じゃなかったんだ！それで良かったじゃねぇか」
スネ夫「でも１年もかかるかもしれないんだよ？パパやママが心配するよ」

ジャイアン「それならタイムマシンを修理して、俺たちがタイムマシンに乗った時に戻ればいいじゃねぇか！」
スネ夫「た、確かに…」
静香「でもそんなに待てないわ…」
帰れる事は帰れるが、1年以上という長い期間ここに滞在しなければいけないのか…
そう思ったとき、霊夢は口を開けた
霊夢「そう落ち込まないで　　もう一つ方法があるんだから」
のび太「もう一つ？それは…」
霊夢「それはこいつに頼む事よ　　出て来なさい、紫！」
そう紫という人を呼び出した
すると何もない場所から、具体的には棚の前の空間から亀裂が走り、口を開いた
それを見たのび太達は驚きつつも、その開いた口の中をみて驚愕した
ジャイアン「お、おい！あれって、時空乱流に巻き込まれた時に出て来た目玉じゃねぇか!!」
静香「ねぇ！中から人が…」
目玉のような背景の口から、人が現れた

「みなさんご機嫌よう　私は八雲　紫　この幻想郷の創始者よ」

第４話　これまでの経緯

「みなさんご機嫌よう　私は八雲　紫　この幻想郷の創始者よ」

空間を切り裂いてその口から姿を現したのは一人の女性だった
いきなりの事に驚いたのだが、それ以上に驚いたのは、のび太達がタイムマシン内で時空乱流を体験した時、時計ではなく無数の目になっていて、その目が紫と名乗る女性のいる空間の裂け目にあったのだ
のび太「あ、あなたが僕達を元の世界に」
ジャイアン「ちょっと待て」
ジャイアンは怒りに震えながらそして、押し殺した声で質問した
ジャイアン「お前…俺たちをこの世界に連れて来ただろ…!?」
スネ夫「ジャ、ジャイアン…?」
ジャイアン「あいつの変な穴の中に俺たちがみた目玉がある
…それならあいつが俺たちを落とした犯人だろ?」
スネ夫「そ、それじゃあ…!」

紫「ええ、そうよ」
みんな「!!」
紫はあっさり自分がのび太達を幻想郷に連れてきた事を自白した
のび太「それは…どうしてですか?」
霊夢「紫…?あんたの好奇心でも、子供を連れて来る事を許す事は出来ないわよ…!」
霊夢は紫を睨んだ
紫はくすくすと笑いながら
紫「この子達はただの子供じゃないわ
それも幾多もの冒険を乗り越えてきた…
私はそんな彼らに興味を持って幻想郷に招いたのよ?」

その言葉にジャイアンは激昂した
ジャイアン「ふっざけんじゃねぇぞ!!そのお陰でどんだけ俺たちが危ない目にあったのか分かってんのか!!
てめぇの珍しいもん見たさで勝手にここに来させんじゃねぇ!!!」
机を叩き、鼻を鳴らしながら紫に向かって殴ろうとした
その時、霊夢を含めた幻想郷の住人４人は驚いた

それはジャイアンが怒った事に驚いた事ではない
ドラえもんとスネ夫、のび太がそれを止めた
せっかく帰れるのに、問題を起こしたくないからだ
ジャイアン「どけぇ!!こいつに一発ブン殴らねぇと俺は気がすまねぇ!!」
怒りを現にしたジャイアンに対し、紫は突如真面目な顔になりこう弁解した
紫「悪かったわ…
本来はここに連れて来ようと思ったけど、謎の力に妨害させられて魔法の森に飛ばしてしまったのよ
それに、今はあなた達を帰す事は出来ないわ」
のび太「え?それはどういう事ですか!?」
霊夢「…私が言いたい事は色々あるけど、紫
この子達に詳しく話しなさい」
紫「もちろんよ　　実は…」

時間は遡り、のび太が学校の昼休みにジャイアン達に空想サファリパークへ誘った時、幻想郷の八雲家の屋敷では…

こたつに入りながら、スキマ（先ほどでた空間の裂け目）の中に顔を突っ込んでいる紫がいた

紫「うーん…」

？「紫様？一体何をしているのですか？」

紫「？あら藍、なんだがスキマの様子がおかしいの　今その点検」

藍「スキマの様子が？」

藍と呼ばれた一人の女性　名前は八雲　藍　紫の式神で九尾の妖怪

九尾の妖怪なだけあって、９本の尻尾が生えていて、頭には犬耳みたいなものが付いているが、それにあった帽子で隠されている

その隣にいたのはばけ猫の妖怪　橙（ちぇん）

二又の尻尾が特徴で、不思議な緑帽子を被っている

紫「そうなのよ

なんだか電気みたいなものが飛び散ってて、そしたらある場所にスキマが開いたの」

藍のスカートの裾を掴みながら橙はこう質問した
橙「ある場所って？外の世界じゃないんですか？」
紫「もちろん外の世界よ
でも何かおかしいのよねぇ…」
紫は開いたスキマを覗き込む
するとそこは大きな建物で、中から子供達がたくさん出て来て、外で遊んでいる
あぁ、ここは学校ね？
紫は見たことがあるようでここが何処なのか理解した
教室をみると、メガネの少年が三人に話している
その中に自分が今まで聞いた事のない話をしている
空想サファリパークや、ペガ、ドラコ、グリといったものだ
これを聞いた紫は
紫「私の知らないものを知っているのね～
…面白い事思いついちゃった」
藍「…嫌な予感が」
藍は半ば呆れた様に言った
紫は自分が面白いと思ったものには首を突っ込んだりするので、その挙動に藍は振り

回されているのだ
紫「なによぉ、私がいつも迷惑事を起こしてるみたいな言い方」
藍「迷惑事を起こしてますよね？」
そういうと紫は返す言葉がなく、「うぅ」と言って項垂れた

外来人と呼ばれる人は何処から来たのか
一つは外の世界の住人が道に迷い、たまたま幻想郷にたどり着くこと
もう一つは幻想郷の創始者の一人である八雲　紫が気まぐれに一人をスキマに落とし、幻想入りさせること
紫の面倒事とはこれのことだ

項垂れたと思ったら半ば開き直って
紫「ちょっとこのメガネの男の子について行こうっと！」
そういうと紫はスキマの中にひょいっと入っていった
藍「あ！紫様！…全く…」
ため息をつく藍に橙は「藍さま？」と心配したが、笑顔で「大丈夫だ」と言った
さて、これが大丈夫で済まされるのか…

その日の夜

のび太は布団を敷きながらわくわくしていた
のび太「明日はペガ達に会える！いやあ、今日は眠れるかなあ？」
ドラえもん「全く…君は調子いいね」
のび太「えへへ…」
わくわくして興奮気味ののび太だが、時刻は午後１１時
早く寝ないと朝起きられなくなるので、無理に布団に入る

紫（…不思議な青いロボットも居たわね
これは凄いものをみたわ…！）

妙に視線を感じる感覚がする
のび太はふと、周りを見渡した

ドラえもんは押入れの中
道具の整理をしているようで、ふすまは空いていない
ではさっきのは一体…？
気のせいかと思ったのび太は布団に入るや否や、約3秒で深い眠りについた

紫「ふふふ…面白い人を見つけたわ…」

翌日

メガネの少年の家に昨日学校で話しをしてた3人が合流し、メガネの少年の部屋で談笑をしていた
紫は、彼らの足元に大きなスキマを作って、博麗神社に繋げて幻想入りさせようとした
しかし彼らは思いがけない場所に行く

なんと、机の引き出しの中に入ったのだ
これには幻想郷創始者もびっくり！
紫はスキマに身を隠しながら彼らの後を追う事に
そこには今まで見た事のない異様な空間だった
自分が使っているスキマに似たような不思議な感じだった
紫はスキマの中に隠れ、もう一つのスキマを作りのび太達を連れスキマに引き摺り込もうとし、力を込めた瞬間

バチィ!!

強い衝撃に紫は吹き飛ばされる
紫「っ！今のは!?」
紫はスキマからタイム空間を見た
するとタイムマシンの後ろから黒い霧のような何かがこちらに迫ってくる
時空乱流だ
紫がタイムマシンごと落とそうと大きなスキマを出そうとした時、その力がタイム空間を刺激し、時空乱流を生み出したのだ

（紫が入っているスキマは小さいもので、開けたとしても拳程度の大きさなので衝撃はそこまでなく、尚且つのび太達のいるタイムマシンの中に隠れていたため、タイムマシンに付いているタイムバリアによってタイム空間への力の干渉はされないが、タイムマシン外にスキマを作ろうとしたため、力の干渉により時空乱流が発生した）

紫「なによこれ！こうなったら…！」
紫は力を込めて先ほどより大きなスキマを作ろうとした

すると…

タイムマシン「ガ…ガガガ…ピー　ザー…」
タイムマシンの音声装置が壊れ、タイムマシンにガタが来てしまい強い衝撃がくる
紫は構わずその衝撃に耐えながら、力を強めると
ジャイアン「おい…何だよ、アレは!!」
タイム空間がスキマに変わった
いや、スキマがタイム空間と混合したと言った方がいいのか？
紫はしまったと思い、スキマの力を弱めようとしたがタイム空間の力とスキマの力こ

の２つの力重なり合ったスキマは制御することが出来ず…

突如強力な引力によって、タイムマシンは引き寄せられる

静香「ねぇ！このままだと吸い込まれてしまうわ！」

のび太「どうするんだよドラえもん！」

ドラえもん「だ…駄目だ　コントロールが効かない！このままじゃ…」

その時、２つの力が協力な引力を作りタイムマシンを飲み込もうとした

その時紫は

紫「いけない！この空間に飲み込まれたらスキマの力を使っても帰る事が出来なくなる!!」

咄嗟に紫は飲み込まれる前に大きなスキマを再度素早く作り、のび太達をタイムマシンごと入れ、自分もスキマを使い脱出した

しかし、咄嗟に作っただけあって、本来繋がるはずの博麗神社には行かず、魔法の森に落としてしまうミスをしてしまい、本人も何処に落としたのかわからず、博麗神社に入ればわかるだろうと思い博麗神社でのび太達をまっていたのだ

帰る方法はここしかないのだから

時間は戻り…

紫「ここまでがあなた達をここに連れて来た経緯よ」
スネ夫「まさか一緒にタイムマシンに乗ってたとは思ってなかったよ」
静香「えぇ、そばにはいなかったし…」
ジャイアン「でも危ねぇ事をしでかしたのはこいつだというのはわかったろ？
こんなやつが俺たちを帰してくれるわけねぇだろ!?」
ドラえもん「…紫さん、僕たちを帰せない理由は一体なんですか？」
紫は難しい顔で帰せない原因を話した
紫「あなた達は特殊なのよ
あなた達がいた世界はこの世界の外の世界とは関係ないのよ」
のび太「…え???」
のび太の頭の上に？がたくさん
スネ夫「えっと…つまりこの世界の外の世界は僕たちがいた世界ではないから、帰す

事が出来ない　　こういう事ですか？」
紫「ええ、考えられないけれど私がのび太くんの家にいって見たんだけど、そこにのび太くんの家は無くて、代わりに小さなアパートが建ってたの」
アリス「ただ場所を間違えたんじゃないの？幾ら何でもそんなことは…」
紫「私もそう思ったわ　　…でも場所自体は正しいの
学校はあったけど何度も確認したけど、あなたの家は無かったわ」
紫の口から聞いた発言に一同は信じられなかった
のび太の家がない
たった1日で家が消滅し、代わりにアパートに変わるなど外の世界では不可能なのだ
紫は詳しく話した　　それはこうだ

スキマに電撃とともに現れたスキマは、外の世界ではなく別の外の世界に繋がってしまった
つまりパラレルワールドの別の世界に繋がってしまったという事だ
これでは例え幻想郷から出たとしてもそこはのび太達がいた世界ではなく、外の世界でタイムテレビも直したタイムマシンも使えないのだ

スネ夫「それじゃあ僕たちもう帰れないじゃんか！ママァ!!!」
紫「でも帰れない事はないわ　　ただ、時間がかかるだけだから」
のび太「どういう事ですか？
あなたのいうスキマを使ってここから出れても僕たちは元の世界には帰れないんですよ？」
紫「確かに私のスキマでは別の世界へ行く事は出来ないわ
でもその原因を突き止める事はできるわ」
ジャイアン「その原因を突き止めてどうすんだよ！
突き止めたぐらいじゃ帰る事は出来ねぇじゃねぇか！」
紫「いいえ、それは大切なことよ？
それはあなた達のいた世界に行くための方法でもあるわ」
魔理沙「だーーー!!!わっかんねぇよ!!結論を言え!!結論を!!」
魔理沙は痺れを切らし怒りを露わにした
ジャイアンに似ている
ジャイアン以外はそう思った
紫はため息をつきながら話した
紫「私のスキマの中で原因を作ったあの謎の力、電撃と共にスキマが開いたあの力、そ

れは何処から来たのか
もしその元凶がわかればあなた達いる世界に帰るきっかけが出来るのでは？」
ドラえもん「では、その原因を探ればいずれか元の世界に帰れる
そう言っているのですね」
スネ夫「いずれってなんか説得力ないなぁ…信用していいの？」
紫「任せて　　こう見えてもこの幻想郷の創始者よ
それにあなた達に迷惑をかけたのだから」
ジャイアン「ふん、信用できないぜ」
ジャイアンは紫を睨み付けたままそう答えた
霊夢「まぁ、帰れる方法がわかったことだし、あなた達今日はここに泊まりなさい」
のび太「え？いいんですか？」
霊夢「もちろんよ　　あなた達を放っては置けないわ」
ドラえもん「ありがとうございます霊夢さん！」
魔理沙「じゃあ私も」
霊夢「あんたはいらないわ」
魔理沙「おい!?せめて帰れでいいだろ!?いらないはないだろ！」
そのやりとりにのび太達は安堵を見せた

帰れない事はない　　時間がかかるだけ
あの紫って人はこう見えても幻想郷では偉い人だ　　なんとかなる
のび太達はそう思った　　いや、そう思おうとした

紫「では私はその原因を探してくるわ
まぁ時間がかかるけど頑張ってみるわ」
霊夢「絶対見つけて来なさいよ
…さもないとあんたを退治するからね」
紫「わかってるわよ　　それじゃ…」
そして紫はスキマを閉め、消えた

（ふふふ、見つけてくるわ…今はまだね？）

アリスは紫がスキマを閉めるとき、不敵な笑みを浮かべてたような気がしたが霊夢に呼ばれて、思考が止まった
霊夢「アリス、ちょっとあの子達から離れた場所で話しましょう　魔理沙もきなさい」
魔理沙「ふいふい」
のび太「あ、僕も行きましょうか？」
霊夢「いいのいいの　そこでゆっくりしてて頂戴　ちょっと今日の夕食の準備をするだけだから」
そう言って三人は部屋から出た
よくある事なのかな？と思いのび太はみんなの輪の中に入った

霊夢「…あの子のこと、どう思う？」
魔理沙「あのデカブツの事か？」
霊夢「ええ、あのジャイアンって子、机殴った瞬間一瞬衝撃波を出してたわ」
アリス「まさか！あの子達は普通の人間よ？」
霊夢「…まだわからないわ」

あのとき、ジャイアンは紫に対して激昂し、怒りのあまり机を叩き出したそのとき、衝撃波のようなものが出て来たという
まだ小さいが、机を叩いただけで衝撃波が出るというのは普通の人間ではまず無理な話だ
しかし、見た目は本当にごく普通の子供
本当にそんな子供達が能力者だと思えなかった
霊夢「とにかく、今日は私があの子達の様子を見るわ　　何かありそうだし…」
魔理沙「あぁ、だから今夜ここに泊まれって言ったのか」
アリス「でもあの子達は悪い子には見えないわ」
霊夢「それは私だってわかってるわよ
でも良い悪いでこのまま放って置くわけにもいかないでしょ？
この世界は外の世界よりも平和かつ、危険なところなんだから」
霊夢はのび太達の一時的な保護者になり、機会があれば人里の家に暮らすようにさせるようにする　　そう考えていた
魔理沙とアリスは人里なら慧音もいるし大丈夫だろ、と納得した
慧音と呼ばれる人物は、寺子屋（今で言う学校）の先生で人里に現れる妖怪を退治し、人里の住民を守る女性の事だ

…幻想郷には女性しかいないのか…？のび太達も疑問に思っていた

アリス「それじゃ、私は帰らせてもらうわ」
魔理沙「じゃあな！霊夢、ガキンチョ！霊夢にいじめられるなよ！」
アリス、魔理沙は自分の家に帰るところだった
静香「アリスさん、人形ありがとうございます　　大切にしますね」
その腕には上海人形が握られていた
アリス「えぇ、大切にね？…それじゃみんな、頑張ってね」
２人は神社を後にした

霊夢「…さてと、あなた達そろそろ夕食にしましょう」

気が付けば夕方になっていた
タイムマシンに乗った時は１０時頃なのに対し、２時間しか経ってたいのに時間は１８時になっていた

多少ラグがあったのだろう
霊夢「じゃあドラえもん、…呼びにくいからドラちゃんでいいかしら？
ちょっとご飯を運ぶの手伝ってくれない？」
ドラえもんは「もちろんです」と快諾し、しずかも「私も手伝います」と３人は台所に行った

霊夢「度々失礼な質問だけど、ドラちゃんってご飯食べれるの？」
ドラえもん「もちろんです！僕は高級ロボットですから！」

残った３人の少年は…
のび太「もうこんな時間か～　　なんだか眠くなって来たよ」
スネ夫「お前はいつも眠いんだろ？こんな時によく眠そうにするなぁ」
ジャイアン「まぁ考えていても仕方ねぇ
あの紫って奴は気に入らねぇが、あの３人は信用できる
俺たちを助けてくれたんだ」
ジャイアンは冷静を取り戻していた

未だに紫への怒りは消えてないが、自分達を良くしてくれる霊夢達（魔理沙…？）の事をありがたく思っていたのだ
ジャイアン「今は何処かに旅行に来たと思ってようぜ！いずれ帰れるんだし」
スネ夫「…そうだよね　　あの霊夢って人、凄く強そうだし紫さんは嫌でも見つけてくるでしょ」
ジャイアン「な？霊夢さんは俺たちの味方だ！それで十分だ！
それに俺たちはいざって時にはドラえもんがいるだろ！」
のび太「…そうだよね！なんとかなるよ
今までだってそうじゃないか！」
そののび太の言葉にジャイアンとスネ夫は珍しそうな顔をして「のび太にしてはいい事言ったな」
と一緒に言った
「そりゃないよー」とのび太は言ったが2人は笑っていた
それを見るとのび太も緊張が解けたのか、のび太も笑った
居間にいる3人には笑顔を取り戻し、明るい雰囲気に変わった

机の上には夕食が置かれていた

白飯、焼き魚、味噌汁、山菜のおひたし
質素ながらもどれも美味しそうだった
霊夢の「いただきます」の号令に合わせてみんなも「いただきます」と言い、のび太は味噌汁に手を出した
のび太「…美味しい！」
霊夢「よかった、あなた達の口にあって」
その味噌汁には魚の出汁を使い、豆腐や山菜が入っていて素材の味を引き出している味は、自分の母親が作ったような味だった
他の料理に手をつけてみるもやはり美味しい

夕食の後片付けをした後、霊夢はのび太達への布団を敷きながらこれからの事を話した
霊夢「明日は人里の方に行くわよ　　そこであなた達を紹介したいし、あなた達の住居をなんとかしないとね」
すると、ドラえもんは
ドラえもん「大丈夫です！　　それは僕たちでなんとかします」

霊夢「え？大丈夫なのあなた達だけで」
ドラえもん「任せて下さい！これでも未来の高級ロボットですから！」
胸にポンッと手を当ててドラえもんは自慢げにそう言った
霊夢は心配だが、紫が言ってたようにのび太達は普通の子供ではない
のび太達は自分達が思っているよりも強いのかもしれない
そう思い、「あまり無茶はしないように」と釘を刺しておいた
客用の布団はあったのだが、５人分の客用の布団は流石になく、２人用しかなかった
しずかは霊夢と、ジャイアンとスネ夫、のび太とドラえもん、と分けて布団を使うことに
のび太達は４時間程しか時間が経っていないが、いろいろあって疲れたのか、直ぐに眠ってしまった

紫「さて、明日は楽しみだわ…！」
藍「全く…」

その翌日、朝日が登る前の薄暗い時間、霊夢は起床した
しずかを起こさないように静かに
今日はのび太達がいるので朝食の準備に取り掛かろうとした
その時

ガチャ　　ガチャ

別の部屋から物音がした
霊夢は何事かと思いその部屋にいくと、そこには見た事のない道具があちこちにあり、その中にドラえもんの姿があった
ドラえもん「あ、霊夢さんおはようございます」
霊夢「おはようドラちゃん　　これは何？ドラちゃんの道具？」
ドラえもん「ええ、そうです
いざっていう時に使えないと大変なので、メンテナンスしているんですよ」
「へぇ～」と感心していると、霊夢は一つの道具を取って見た
霊夢「ドラちゃん、これって」
ドラえもん「!!霊夢さん、そのボタンを押しちゃだめ!!」

霊夢「（ポチッ）え？」

珍しい道具のスイッチを押した瞬間、霊夢は何故か体が軽く感じた
いや、軽くなったのではない　　浮いているのだ
自分だけではなく、ドラえもんがメンテナンスのために置いたひみつ道具も、ドラえもん自身も、そこにあった家具すらも宙に浮いているのだ
霊夢「!?ドラちゃんこれって…」
ドラえもん「…重力調節器です。この部屋を無重力空間に変えたんです」

…霊夢がドラえもんのひみつ道具の凄さをしった瞬間だった

重力調節器のせいで無重力になっていたのを元に戻したところ、宙に浮いていた道具、棚が落ちそうになり2人が慌てて元の場所に戻した後
霊夢「…ふう、ごめんなさいね？勝手に触っちゃって」
ドラえもん「いいんですよ　　こうして僕の凄さをわかってくれたのなら！」
そう言うと、ドラえもんはまだメンテナンスし終わっていない道具をポケットから出

して、謎の工具を使ってメンテナンスをやり出した
霊夢（あんな小さなポケットからあんな沢山の道具が…凄いわね…）
少し驚いたところで、霊夢は台所へ向かっていった

全員が起き、朝食終了後

霊夢「じゃあみんな、今から人里に行くからちゃんと付いてくるのよ？」
みんな「はい！」
霊夢が昨日言ったように、人里へのび太達の紹介、案内、そして住居探しに今から向かうのだ
霊夢「ドラちゃん、昨日あなた達空を飛んでいたみたいだけど…今日も飛べそう？」
ドラえもん「はい！バッテリーも回復しているので、じゃあみんな、行こう！」
そう言うとポケットから５本のタケコプターを取ってみんなに渡した
霊夢「それじゃあ行きましょう」
霊夢達は空を飛び、人里の方に向かった

霊夢「便利な道具ね　　私も何本か貰っちゃおうかしら？」
霊夢は飛びながら冗談をいった
のび太「ははは…流石にそれはダメですよ」
霊夢「ふふっ冗談よ…!!」
霊夢は突然真剣な表情に変わる
ドラえもんは何事かと思い前をみる　　すると
スネ夫「煙…？」
霊夢「人里からじゃない！まさか…
ドラちゃん達！ここで待ってるのよ！」
そういうと、霊夢はスピードを上げて人里の方に向かった
のび太達も訳が分からず、霊夢の後を追うことにした
その先には民家が崩れて、その周りに獣に似た妖怪が大量にいた

人里が襲撃に遭ったのだ

第５話　幻想郷での戦闘

のび太「なんだよ…これ…」

のび太達が見たのは悲惨な光景だった
本来そこに建ってたであろう家が、瓦礫の山と化したり炎を上げていたりと、滅茶苦茶な事になっていた
のび太達は急いで霊夢の後を追った
するとそこには霊夢と、霊夢に支えられている血だらけの女性がいた
霊夢「慧音!?しっかりしなさい！」
慧音「霊夢…　すまない…無様な姿を見せて…」
霊夢「一体何が遭ったの!?」
慧音「妖怪共の…襲撃だ…朝方に…奇襲をかけて…

不意を突かれて…このざまだ…」
慧音は背中と足に酷い傷を負っていて、動く事が出来なかった
霊夢は怒りを露わにし、妖怪に向かって一喝した
霊夢「覚悟しなさい妖怪ども！人里を襲ったその罪は重いわよ!!」
そして霊夢は妖怪の集団に向かっていき、懐から札のようなものを取り出した
霊夢「霊符【夢想封印】」
すると、彼女の側から無数の札や光弾が飛び、妖怪達を襲いかかった
それを直撃した妖怪は吹き飛ばされ動かなくなり、躱した妖怪は霊夢に向かって襲いかかった
霊夢「あんた達はもう終わりよ」
すると、躱したはずの光弾に妖怪は直撃し、爆発と共に消えた
霊夢「その弾はホーミングがついてるの
あんた達には避けられないわよ」
霊夢は他の妖怪を倒そうと向かうが、妖怪が向かっているのは自分ではなく、他の場所を目指して向かっていった
その場所は…
霊夢「しまった！慧音！」

霊夢が戦っている間、妖怪は動けない慧音の方に向かっていった
慧音は力を使い果たしたのか、怪我の所為なのか妖怪に攻撃する事が出来ない様子
妖怪は慧音に向かって走り出し、鋭い爪で引き裂こうとした
霊夢「慧音!!」

「空気砲!!」
ドカン!!

突如妖怪の横から空気の塊が襲いかかり、妖怪は数十メートル先に吹き飛ばされた
吹き飛ばされた妖怪は気を失っていた
一体何が起こったのか、霊夢はその弾がきた方向をみるとそこには…
霊夢「ドラちゃん…!?それにのび太くん達も!」
空気砲を持ったドラえもん達がそこにいたのだ
ドラえもんはすぐに慧音の方に向かい、慧音の保護をした
すると、妖怪は唸り声を上げて襲いかかってきた
ドラえもん「ジャイアン!これを使って!」
【パワー手袋】!
ドラえもんのポケットから出したのは、オレンジ色の手袋だ
それを渡されたジャイアンは手に装着し、妖怪に向かって走り出したのだ
霊夢「!何やってるのよ!逃げなさい!あんた死んじゃうわよ!!」
妖怪とジャイアン、その差は5メートル
もう駄目かと、霊夢はそう思ったが

ドゴオオオオン

凄まじい衝撃が霊夢達を襲った
ジャイアンが妖怪をぶん殴った瞬間、あまりの衝撃で周囲の瓦礫等が吹き飛んだのだ
ジャイアンの殴打をモロに食らった妖怪は数百メートル先に飛ばされ、動かなくなった
それを見た妖怪は怯む
ジャイアン「どうだ!!これがジャイアン様の実力だぜ!!」
鼻を鳴らし、ガッツポーズをとったジャイアン
ドラえもん達はジャイアンの馬鹿力に少々驚きつつ、ドラえもんはポケットからひみつ道具を取り出した

【傷薬付き自動巻き包帯】！
それを慧音の頭に取り付けた
すると、包帯が怪我をしている背中や足を勝手に巻き付けられていく
止血を終えた後、ドラえもんは慧音を守るためのび太達に武器を渡した
しずかは慧音の容体を確認し、スネ夫は【瞬間接着銃】を使い妖怪を戦闘不能にしていく
【瞬間接着銃】は協力な接着剤を飛ばし、動けなくさせる銃だ
霊夢は驚きのあまり棒立ちになっていた
霊夢「凄い…子どもなのに…それも外来人で能力もない子ども達が妖怪を圧倒している…」
霊夢はその様を見ていたが背後に殺気がして、はっと我に返った
霊夢は振り返るも妖怪は飛びかかり、霊夢に向かって爪を突き出したが、
のび太「霊夢さん、危ない!!」
バンッ
咄嗟にのび太は自分が持っていた武器を使って、妖怪を撃った
のび太が持っていた武器は【ショックガン】

殺傷能力は無いが、相手を気絶させる事が出来る
のび太は妖怪を気絶させる事に成功したが、驚くことにそこは約１００メートルもあったのだ
それに直線上に霊夢がいたので、妖怪の姿があまり見えなかったが、のび太は少し見えた妖怪の額に的確に当てたのだ
霊夢「え…あ…」
霊夢はその神業を見て若干の放心状態に陥ったが、今は襲撃に遭っている最中、霊夢はすぐに立て直し、のび太にハンドサインで礼を言って妖怪に向かっていった
（やっぱり霊夢さんは強いなぁ…）
のび太はそう思った時、後ろから
スネ夫「のび太！そっちに2体向かっていったぞ！気をつけろ！」
のび太「！　わかった!!」
そういうと、のび太も妖怪に向かっていった

約３０分後、全ての妖怪を倒し、妖怪達の後始末を終え、慧音を家に送った霊夢がのび太達の方に戻って来た
幸い慧音は命に別状はなかった
あの怪我で命に別状はない、というのは考えられないがその秘密は後ほど…
スネ夫「あ！霊夢さん、大丈夫ですか！」
霊夢「それはこっちのセリフよ
…でもあなた達凄いわね　妖怪を倒せるくらい強いなんて…
それにのび太くんに助けられたし」
静香「そうなの？のび太さん」

のび太「えへへ…たまたまだよ」
照れながらそういうのび太に、もう一度「ありがとう」と礼を言うと、顔が赤くなっていった
ジャイアン「俺は楽しかったぜ！いや～昨日イライラしてたからスカッとしたぜ!!」
それを聞いた霊夢はドラえもんに向かって質問した
霊夢「…ねぇドラちゃん
あのジャイアンって子、あんなに強かったの？」
ドラえもん「えっと、それは僕の道具で」

パワー手袋の説明をした後、霊夢はもう一つ質問した
霊夢「なるほど…
そのパワー手袋を使えばさっきみたいに衝撃波みたいなのも出す事が出来るの？」
ドラえもん「いえ…そもそもあんなに強いパンチを出した所を見たことはないです」
霊夢はその答えを聞いたとき、ある仮説を立てた
ジャイアンがあの強い力を出すことができたのはドラえもんの道具のおかげだけで

はない
幻想郷にきてからジャイアンは強いパンチを出す事ができた
それも衝撃波を出せるほど
霊夢はドラえもん達に質問した
霊夢「ねぇみんな、幻想郷にきてからなんか体が変わった事ない？」
その質問にのび太達は首を傾げながら
スネ夫「うーん…よくわかんないなぁ」
のび太「病気とか何もないですよ？」
ジャイアン「普段より身体が軽くなった感じがするくらいだな」
静香「あ！それ私も思った！」
霊夢「なるほどね、だいたい理解できたわ」
のび太達は目を丸くして霊夢を見つめた
一体何を理解したのか、何に対して引っかかっていたのか
その答えは…
霊夢「あなた達、この幻想郷に来てから身体能力が高くなったんじゃない？」
のび太「え？」
予想外の答えがきた　何故なら

スネ夫「そんな自覚ないんだけどなぁ…」
自覚もなにも、強くなった事さえもわからなかったが、身体が軽くなったことに関係があるのかもしれない
ジャイアン「俺は前より強くなったと思うぜ!!どんな奴でも敵なし!!ってな感じだ！」
霊夢「やっぱり！
でも何故かしら…普通外来人でこんなに強くなる事はないのに…」
その答えはわからないままだった

静香「あの…霊夢さん
さっき怪我してた女性の方は…」
霊夢「あぁ、慧音のことね
彼女なら大丈夫よ、命に別状はないわ」
静香「よ、よかった…」
しずかはほっと溜息をついた
スネ夫は疑問に思い、霊夢に質問した
スネ夫「霊夢さん、あの慧音って人はあんなに怪我を負っていたのによく無事でいた

んですよね

…もしかしてあの人も魔法使いなんですか？」

霊夢「魔法使いではないわ、えっと…

そうだ、詳しい話しは本人にしてもらいましょ、お見舞いを兼ねて」

霊夢の言葉に一同は頷き、慧音がいるとされる【寺子屋】に向かった

「いやぁ～　いいネタが出てきましたね！さっそく帰って記事を作りましょー！」

霊夢「さあ着いたわよ」

ジャイアン「すげえ…ここが寺子屋かぁ」
のび太「ねぇ…寺子屋ってなに？」
スネ夫「のび太にわかりやすくいうとだなぁ、学校だよ、学校」
のび太「あぁ、学校かぁ…なんか嫌な予感がする」
スネ夫「お前勉強嫌いだもんな」
ジャイアン「先生に怒られる度にドラえもぉ～んって言ってるもんな！」
のび太「う…、そんな事より早く行こう！」
霊夢「えぇ、さあこっちよ」
霊夢に連れられて、寺子屋の中に入っていく

霊夢「慧音、入るわよ」
慧音「ああ　霊夢か、入ってくれ」
襖を開けると、布団に横たわっている慧音の姿がいた
包帯が新しく変わっていたが、血の跡はない
どうやら傷が塞がってきているのだろう
慧音「霊夢、その子達は…まさか！」
霊夢「えぇそうよ　　さっきの襲撃で大活躍した子供達よ

…1人子供じゃないのがいるけど」
のび太「大活躍なんて、そんな…（照」
ジャイアン「ま、俺様の敵ではなかったがな!!ガハハハハ!!」
慧音「やはりそうだったか！あの時は助かったよ、礼を言うよ」
静香「お礼なんていいですよ
それより大丈夫なんですか？」
慧音「あぁ、そこの青い人（？）に手当てしてくれたから大事には至らなかったよ」
ドラえもんが襲撃時に応急処置として使った【傷薬付き自動巻き包帯】が効いたのだろうか
そう思っていた彼らの思惑を察したのか、霊夢は慧音に
霊夢「慧音、この子達は何故そんなに早く傷が治るのか不思議がっているわよ？
説明してあげたら？」
慧音「あぁ、そうだな」
そして慧音の口から自分の正体を明かした

慧音「私は半人半獣、ワーハクタクと呼ばれる者だ」

のび太「ワーハ…なんですか?それは」
スネ夫「僕もわかんないなぁ　　出木杉に聞けばわかるかもしれないけど」
慧音「ワーハクタクは、まぁわかりやすく言うと獣だ
私は半獣、つまり妖怪のハーフなんだ」
のび太達は驚いた
…この世界に来てから何度驚いたのだろうか
妖怪のハーフなだけあって、生命力は普通の人間を凌駕するほど
あれほどの傷をしてもなお、起き上がれるほど回復していたのだ
ただ、ドラえもんの応急処置がされてなかったら、出血多量やら何やらで無事では済まなかったはずだ
ドラえもん「ここは…この世界は外の世界の常識には囚われてはいけないんですね
身を以てわかりましたよ」
ドラえもんはやや諦めムードで話した
こうなるとお化けや妖精なんかもこの世界にはいるんだろうなぁ
のび太はそう思っていると、襖の外から声が聞こえた
?「慧音!?大丈夫か!」

慌ただしい声が近づき、荒々しく襖をあけた
札の様なものが貼られたモンペと白髪が特徴の女性に対して
慧音「妹紅か、心配させたな　　私は大丈夫だよ」
妹紅「そ、そうか　　よかった…」
そう言うと妹紅と呼ばれた女性は腰が抜ける様な勢いで座り込んだ
慧音「そこの子供達に助けてもらったんだよ
もし彼らがいなかったら私は死んでたかもしれないな」
そう聞くと、妹紅はのび太達に頭を下げた
妹紅「ありがとう　　慧音を助けてくれて
慧音は私の唯一無二の友人なんだ　　本当にありがとう」
そこまで言われると何だか恥ずかしくなってきたのか、のび太は
のび太「顔を上げてください！僕達は当然の事をしただけですよ！」
スネ夫「そうですよ　　困ってる人がいたら助けるに決まってるでしょ！」
ジャイアン「よく言うぜ　　あの時妖怪の前で足がガクガク震えてビビってたのは
一体どこのどいつだ？（ニヤニヤ」
スネ夫「うっ…」
このやり取りにドラえもんは無視して

ドラえもん「ええっと、改めて皆さん自己紹介をしましょう」
妹紅「あぁ、そうだな
申し遅れた、私は藤原　妹紅　　慧音の友人だ」
慧音「私は上白沢　慧音　　寺子屋で教師をしている者だ」

「　　僕　　ド　　ラ　　え　　も　　ん　　」

自己紹介が終わり、慧音は霊夢に質問した
慧音「霊夢…彼らは外来人だろう？」
霊夢「あ、気付いた？」
慧音「気付くも何も、服装を見ればわかるだろう
それに彼らは未知の道具を持っているし」
妹紅「未知の道具？何だそれは」
慧音「先ほどの襲撃で私を助けてくれた時、妖怪を退治する時に彼らは未知の道具を

使っていたんだ」
妹紅「ちょっと待て！さっきの襲撃して来た妖怪共をあの子供達が倒したのか!?」
霊夢「私も何だけど…」
慧音「あぁ、彼らは強かった　　それは子供の強さじゃなかったよ」
妹紅「へぇー、ただの可愛い子供じゃないんだなぁ」
霊夢「それより、あんた何でここに来たの？
心配で来ただけじゃないでしょ？」
妹紅「あぁ、そうだった
里の住民が怪我してるからこれから永遠亭に送るから慧音も連れてこうと思って来たんだが…
その必要は無いみたいだな」
慧音「あぁ、今日1日安静にすれば大丈夫だ」
妹紅「そっか　　じゃあこれから住民を連れていくから
気を付けてくれよ」
慧音「あぁ、心配かけたな　　気を付けてな」

そう言うと、妹紅は外に走っていった

ドラえもん「さて、これからどうしようか？」
スネ夫「このまま家探しって言うわけにはいかないよね」
静香「そうね　　まずは人里を何とかしないと…
ジャイアン「おいドラえもん、こう言う時の便利な道具ねぇのか？」
ドラえもん「無茶言わないでよ　　ここは別世界だよ？
ここの建築もわかんないし、まず僕は専門外だからここはこの人里にいる職人に頼らないと…」
スネ夫「確かに…近代的に建物になると逆に変だし…」
のび太「それなら、里の人達のお手伝いでもしてあげようよ！」
静香「そうね、ここに来たばかりでここの人達に顔を知って欲しいしね」
ジャイアン「そうと決まったらさっさと行こうぜ!!」
そう言うとのび太達は寺子屋を飛び出し、人のいる場所へと走り出した
ドラえもん「やれやれ、世話が焼けるなぁ…」
ドラえもんも遅れてのび太達の方へ向かっていく

霊夢「元気ねぇ」
慧音「あぁ…」
２人は霊夢が用意したお茶を啜る

第６話　　里の絆

ドラえもん達が向かっていったのは襲撃にあった里の東側
里の復興の為に大人だけでなく、子供の姿もあった
自分の世界にいる子供よりなんというか…生き生きしていた
自分のいた世界の子供はもちろん外で遊んだりするが、外に出ず家でゲームする子供や、ここまで大人と、それも赤の他人であろう人と自ら率先して手伝おうとするのは少ない

なんだかククルがいたヒカリ族みたいだな…

復興の為に瓦礫の撤去、建築の準備を子供達としてる所を見ていたジャイアンは「俺も負けてられねぇぜ！行くぞスネ夫！」

そう言ってジャイアンとスネ夫はそこにいたおじさんに

ジ「おじさん！俺たちも手伝うぜ！」

「そうか、助かるよ

えっと君たちの名前は？」

ジ「俺は剛田　武、こいつはスネ夫だ！」

「そうか

じゃあ武くん、スネ夫くん、あそこの瓦礫の撤去を手伝ってくれないか？」

ジ「そんなのお安い御用だぜ！行くぞスネ夫！」

ス「おお！」

そういうと二人は崩れた瓦礫の方に向かっていった

おじさんは「怪我しないでくれよ！」と二人に向かって大声で言った

の「元気だね　二人共」

ド「そうだね　じゃあ僕たちも行こっか」

の「そうだね」

そういうと３人は瓦礫のそばで作業をしているおばさんに
の「おばさん！僕たちもお手伝いします！」
し「私達に何かできることないでしょうか？」
「あら、それじゃあ仕分けをお願いできるかい？」

瓦礫には家具等が入っていた
使えそうな物は綺麗にしてまた使う
使えない物はを分解して他のものを作る材料にする
いわばリサイクルだ
ド「任せてください！」
「あらあら、可愛いタヌキが喋ってるわぁ
命蓮寺のペットか何かかしら？」
のび太は、また始まったと思われたが…
ド「僕はタヌキじゃないですよ、ペットでもないですよ」

あぁ…　反論するの諦めたんだね…ドラえもん…

のび太は遠目でそう思った
しずかはおばさんが話した内容に疑問を感じ、質問した
し「命蓮寺って何ですか？」
「あら、あんた達ここの住民じゃないの？」
の「はい、ここでいう外来人です、遠くから来ました」
「まぁ！子供なのにそれは大変だったでしょう」
し「いえ…ここの状況よりそこまで大変ではなかったです
それより…」
「あぁ、命蓮寺のことね？
命蓮寺はこの里にある寺院のことだよ」
ド「へぇ～、ここにはお寺もあるんですね」
「そこには聖さんがいる寺院でね、そこの関係者は妖怪がいらっしゃる場所なんだ」
の「妖怪!?」
「あぁ、妖怪は妖怪でもさっきここを襲った妖怪じゃないよ？
私達人間にも優しくしてくれる
というより、人間とほぼ変わらない妖怪さ」

し「そうなんですか…
ねぇドラちゃん、ここのお手伝い終わったらちょっと見に行ってみない？」
ド「そうだね、そこのペットに間違えられたし、なんだか興味が湧いて来たよ」

このとき、ドラえもんは命蓮寺に潜むトラウマに
出会ってしまう事をまだ知らなかった…

ジャイアンとスネ夫は崩れた瓦礫を側にいたおじさんと里の子供達と一緒に撤去
ドラえもんとのび太、しずかはその撤去された瓦礫から使えそうな物をおばさん達と

一緒に仕分けしていた

そして約3時間後…

昼の12時、瓦礫は半分以上取り除かれた時
慧「みんな！昼食の時間だぞ、集まってくれ！」
慧音が里の女性達と一緒に昼食を差し入れとして持って来てくれた
慧音はやはり一人布団で寝ている訳には行かなかったようだ
自分は何ができるか
外で頑張っている人の為に昼食を作る
慧音はその考えに至った
肉体労働をしてヘトヘトなジャイアンとスネ夫は「待ってました！」と言わんばかりに慧音の元に走って行った
一軒の食堂の前に簡易的に机、椅子が設けられた所に料理を用意していた
料理といっても、おむすび、味噌汁、漬物と質素な物だったが、ジャイアンは無我夢中で食らい付いた

汗を流して動いた後、疲れが最高の調味料だ
何処かで見聞いたことがある
それほどおむすびが美味しかったのだ
その昼食後、おじさんとおばさんが
「ありがとう、ここからは大人の俺たちがやるから、おまえら子供達は遊んで来なさい」
「命蓮寺に行くんでしょ？気を付けていって来なさい」

ひとまずお手伝いは終わった事だし、一度慧音の元に行くことにした

慧「あぁ、みんな　お疲れ様
疲れただろう？」
の「えぇ、慧音さん大丈夫なんですか？」
慧「あぁ、無理な事は出来ないが、歩く事は出来るからもう心配しないでくれ」
し「それならいいんですが…
あの、霊夢さんは？」
慧「あぁ、今買い出しに出かけているのだろう

時期に……といった側から帰ってきたな」
そういうと里の西の方から買い物袋をもった霊夢が帰ってきた
霊「あら、お疲れ様　　ドラちゃん達」
し「霊夢さん、私達これから命蓮寺に行こうと思っているんです」
霊「あぁ、聖がいる寺ね…いいけど、私はもう帰らないと
面倒だけど神社の掃除をしないとね」
の「そうですか…ここでお別れですね…」
霊「何そんな顔してるのよ、いつでも会えるじゃない
　それに命蓮寺には慧音に連れて行って貰いなさい」
ド「え？いいんですか？」
慧「あぁ、霊夢に頼まれたんだ
君たちの居住地を確保するまで私が面倒を見るようにな」

のび太達が東里の東側に向かった後、霊夢は慧音に「あの子達を頼める？」と
慧音自身はもちろん、というか喜んで引き受けた
幻想郷で迷っている外来人、更に子供というなら放って置く訳には行かない
御節介焼きの慧音には断る理由はなかった

ス「いいんですか？」
慧「あぁ、もちろんだ！
ただし、その間は私の寺子屋で授業を受けてもらうぞ」
みんな「ありがとうございます！」

の「うぅ…勉強かあぁ…」

霊夢は博麗神社に帰って言った後、のび太達は慧音の案内で命蓮寺に向かって言った

慧「ついたぞ、ここだ」

の「ここが命蓮寺…」
ジ「なんか思った通りの寺だなぁ」
大きな門を潜ると
「あれ？参拝者ですか？」
そこには青のフードを被った女性…と、その後ろに煙のような何かがいた
慧「一輪、彼らは初めてこの里にきた子供達で、
命蓮寺への案内をしていたんだ」
一「あぁ、誰かと思ったら慧音じゃない　　そういうことねぇ」
の「えっと…あなたはこのお寺で働いている人ですか？」
一「まぁそんなところね　　私は　雲居　一輪　　こっちは雲山よ」
雲山「……」
後ろの煙は雲山の雲だった
雲山は無言で子供達にお辞儀（？）をした
一「で、どうしたの？」
し「私達、今日からこの里でお世話になるので
挨拶をとここに来ました」
一「あら丁寧にどうも」

雲山「……」
一「お主は殊勝な少女だな、感心した…と雲山が言ってます」
し「は、はぁ…」
慧「それより中を見て回っていいだろうか」
一「えぇ、どうぞどうぞ」
一輪の許可を貰い、奥に入っていった
一輪もそうだが、途中大きな声で「こんにちは!!」と挨拶をしてきた子供も、妖怪だった
やはりここは妖怪達が住んでる場所
しかしのび太達はその妖怪達は自分達人間とはほぼ何も変わらない
そう思っていた

慧「さぁ、大体見回ったから、聖に会いにいくぞ」
の「あの、その【ひじり】って人は誰なんですか?」
慧「ここの住職だ」

ス「もしかして…その人も女性ですか？」
慧「あぁ、そうだが…どうした？」
ス「えっと、女性の住職は珍しいなぁって…」
ジ「それにこのげんそーきょーって世界、ほぼ女しかいねぇよな？」
慧「まぁ女性ばかりなのは認めるが…
さぁ行くぞ」
慧音達は命蓮寺本堂の中に入っていった

慧「さてと…聖、いないか？慧音だ！」
白蓮「あら、慧音さんじゃありませんか
それに…お連れの方達も、何か授業の一環ですか？」
慧「いや、彼らは外来人だ
この里で世話になるから挨拶をしたいと言ってな…」
白蓮「そうですか、ご丁寧にどうも
私は命蓮寺の住職、聖　白蓮と申します」
髪の色が印象のこの女性　　中心は紫で、毛先が黄色とグラデーションがかかってるような髪

この人が住職と言われると疑ってしまうほどのび太達は信じられなかった
しかし「人と妖怪、神様を等しく」という考えをもち、それに対する想いは人一倍、いやそれ以上あるのだ

白蓮はドラえもんを見て
聖「あら、マミゾウの新しいペット？…という訳ないですよね」
ド「マミゾウ？誰なんですかその人」
聖「この命蓮寺に住んでる妖怪です
どんな妖怪というと…化け狸の妖怪です」
ド「あぁ……だからボクはそのペットと間違えられたんだねぇ……」
反論する気は失せたらしい
今ならタヌキと間違えられても怒る気力はないみたいだ
の「ドラえもんはこう見えてネコ型ロボットなんです
それに僕たちの親友です！」
聖「ロボット…というのはよくわかりませんが…
のび太さん達の…通りで仲が良いのですね」

ジ「おう！ドラえもんは俺の心の友だぜ!!」

聖「えぇ…皆さん、友を大切にして下さいね？

例えロボットでも妖怪でも、想い合えば種族なんて関係ありません

誰でも仲良く出来るのです」

の「はい、僕たちもよくわかります

いままでそういう体験した事ありますから…」

白蓮は静かに微笑んだ

【そういう体験】というものは慧音と白蓮はわからなかったが、のび太達は優しい心を持っている

きっと彼らなら妖怪と人間との仲を繋ぎ止める事が出来るのかも知れない

ふとそう思っていると外から声が聞こえた

「白蓮様、ご主人は見ませんでした？」

ド「!!!!!!!!!」

第７話　　青狸異変

「白蓮様、ご主人は見ませんでした?」

襖を開!けて白蓮に聞きにきた少女にドラえもんは目を見開いて

ド「!!!!!!!!!!」

額から汗が流れていく

その少女は…ネズミのような耳をして、ネズミのような尻尾をしている

言うなれば、ネズミが擬人化した姿がその場に居たのだ

…その尻尾に小さな籠が付いてるが

「…ん?白蓮様?その人達は?」

聖「あぁ、この方々は外来人で命蓮寺へ挨拶に来て下さったのですよ

紹介します　　彼女はナズーリン!!
【妖怪ネズミ】ですッ!!!!
ド「(；。д。)!!!!」
ドラえもんの汗は止まらない!!
ド（で、でっでP!で、でもっ！ヒトの形ッ!!だからっまだマヒっ!!……かなっ!?）

ドラえもんはビビリながら心中でそう思ったが
トドメと言わんばかりに尻尾の籠から小さなネズミが顔を出し
可愛らしい顔で首を傾げながら
ネズミ「チュー?」
その声を聞いたドラえもんは…

ド「ギャアアアアアアアアアアアア!!!!!!

ネジミィイイイイイイイ!!!!!」

天井に頭をぶつけるぐらい飛び上がり、ドラえもんはとてつもないスピードで外へ逃げ出した

あぁ、確かドラえもんってネズミが大の苦手なんだっけ?

のび太は呆れながらそう思った

脅かした(?)ナズーリン本人はのび太達に聞いた

ナ「?なぁ、何故あの青狸は逃げ出したんだ?」

ス「ドラえもんはネズミが大の苦手なんです

見るのもダメでネズミのネの字すら…」

ナ「……へぇ～」
ナズーリンは少し笑みを浮かべたが、のび太達は
の「そ、それよりドラえもんを探さないと！」
し「そ、そうね！行きましょう！」
のび太としずかはドラえもんが逃げ出した方向へ走っていった
ジ「いつもの事じゃねぇか
…仕方ねぇなぁ、おいスネ夫行くぞ」
ス「全く、世話が焼けるなぁ」
どこかで聞いたような言葉を残してジャイアンとスネ夫はのび太についていった
慧「…わ、私達も向かうか」
聖「そ、そうですね！」
ナ（…悪戯しよう）
慧音達も続いて向かう事に

外を探したが見つからなかった
門の近くにいた一輪、雲山親子に聞いても
一「ドラえもんですか？見てないですよ？」
雲「……」
一「門には誰も出入りしていない
という事は命蓮寺から出ていないということだ
…と雲山は申しております」

それなら建物の中か？
そう思い、のび太は本堂の西側の部屋の襖を開けると

ズキューンッ!!!!

襖の隙間から青いレーザーが飛び出してきた

の「うわぁ!!!!」
ギリギリ素早く躱したのび太だが
レーザーが飛んでいった先には壁があり、大きな穴が空いていた

ド「な……なんだ……のび太くん……か……」
の「なんだじゃないよ!!危うく僕自身が穴が開いてしまうじゃないか!!」
ド「ご…ごめん、てっきりネズミかと……」

そういえば同じことあったような…

すると

ドドドドドドド…

なんだろう…何かがどんどん近付いてきてる
それも沢山

まさか

ネズミ「チューチュー♡」

ド「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!」

とてつもない数のネズミがドラえもんを追いかけていた
ドラえもんはというと目に数字や英語の文字を点滅させながら逃げ惑っていた

ネズミ「チューチューチューチュー♡」
ネズミ「チュッチュー!」
ネズミ「チュピチュー」
ド「イヤアアアアアアアアア!!!!!」
そのまま外に飛び出していた
声を聞いたのか、他の面子もこちらに来た
ス「おい！こっちにドラえもんの声が聞こえたぞ！いたのか？」

の「う、うん！こっちだよ！」
一向はドラえもんを追いかけてるネズミを追いかけた

青狸逃走中…

追いつくと、ドラえもんはネズミに囲まれていた
ドラえもんは背を塀に阻まれ逃げる事が出来なかった
ド「うわあ!!く、来るなぁ!!」
ネズミ「チュー♡」
ネズミ「チュゥ…」

ド「イヤアアアアアアアア!!!」

ジ「うわぁ……地獄だなぁ」
ス「トラウマの塊に囲まれたらヤバイよね…」
ナ「……ククッ」
（ああ面白い、可哀想になって来たからそろそろやめてやろうかな？）

ド「……」

ナ（…あれ？急に静かになった…？）

ド「……フ…………フフ………」

フフフフヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

ナ「!?」

一同の顔が引きつった
悲鳴をあげていたドラえもんは頭のネジが外れたかのように不気味に笑い出したのだ
ジ「お、おい…なんかドラえもんの奴、おかしくねぇか？」
慧「確かに…なにか壊れたかのような…」
の「…イヤな予感がする」
のび太よ　　それは俗に言うフラグだ

ドラえもんは不敵に笑い、ネズミに向かって話す
ド「フヒヒッ　ソウダ…ヨク考エタラコイツラヲイチモウダジンニ出来ルホウホウガアルジャナイカァ……」
（良く考えたらコイツ等を一網打尽に出来る方法があるじゃないかぁ）

ネズミ「!?」
ド「ガ…ガガ……グギギガ……」

ドラえもんはポケットから重そうな鉄の塊を出そうとしたのび太は直感でこれはヤバイ
そう思ったのかドラえもんに向かって走り出した
ドラえもんが出した物は

ド「チ……チ…チ、地球破壊爆弾デ…星ゴト吹ッ飛バシテ…」
の「ドラえもん！駄目!!」
のび太はドラえもんから地球破壊爆弾と言うものを引き剥がして、羽交い締めにした

聖「…まさかと思うけど、ナズーリン？貴方がやりましたよね？」
ナ「あ…あはは、まさかあそこまでビビるとは思わなかったよ」
するとのび太が叫ぶように
の「みんな手伝って!!僕だけじゃ抑えられない…！」
ジ「ん？何でだよ面倒くせぇ」
ス「おまえ男だろ！しっかりしろ！」
慧「そう言うな、手伝ってやりなさい」
笑いながらそう言ったが

しかし、次の言葉でみんなの表情が変わる

の「止めないとドラえもんはこの星を吹き飛ばしてしまうぞ!!!」

真剣な表情で捲し立てた

それを聞き5秒後…

ジ「は、早くドラえもんを抑えろお!!!」
ス「うわあ!!ママァ!!!」
し「ドラちゃん落ち着いて!!」
慧「し、しっかりするんだ!ドラえもん!!」
聖「ナズーリン!早くネズミ達を離しなさい!!」
ナ「わ、わかった!」

ナズーリンがネズミに命令
ドラえもんから見られない場所にネズミを向かわせ
ジャイアンとスネ夫はドラえもんを羽交い締め
のび太は地球破壊爆弾を持ち、離れ
しずかと慧音はドラえもんの説得
スネ夫以外無駄のない素晴らしい連携だった

だが…

ド「ウグググ……ヌガアアアア!!!」

ジャイアンとスネ夫を振り払い、ポケットから銃を取り出したの「あ!あれは【熱線銃】!!」

ド「コ…コノ寺ゴト…消エテナクナレ…!」

ドラえもんが命蓮寺に向けて銃を向け…

ジ「うおおおお!!!」

ジャイアンのタックルによりドラえもんは倒れ、銃口は空に

ギュゥゥゥン!!!

引き金を引いてしまい熱線が空に…

対象がない熱線は空で爆発し…

強烈な光と共に衝撃が走った

慧「う……こ、こうなったら…！」
慧音はふらふらになりながなジャイアンに押さえられているドラえもんの方へ向かった
ジ「…け、慧音さん…？」
慧「大丈夫だ…すぐに終わらせる…」
そう言うとジャイアンを退かしてドラえもんの上体を起こした
ド「ガガガ…ゴギ…ガガギ…ゴギ…」
すると慧音はドラえもんの頭を持ち、慧音は頭を反らし

慧「頭を冷やせ!!!」ゴーーン!!

慧音がドラえもんに頭突きを食らわせた

こうして青狸異変（？）は慧音の手によって解決された…

後に文々。新聞では、頭突きをした慧音は一瞬気を失いそうになったそうで、ドラえもんの頭はとにかく硬かったようで

慧「できればもう二度とあいつとしたくない」…とコメントしたそうだ

慧「おい、どこに行くんだ？」
ナ「え!?…えっとご主人を探しに…」
慧「その前にだ…なに、すぐに終わらせる」

ゴーーン!!!

第８話　文々。新聞

聖「……本当にうちのナズーリンがご迷惑をお掛けして、申し訳ありません…」

……何回聖さんは頭を下げたのか

青狸騒動の主犯だったナズーリンは白蓮と慧音にこっぴどく叱られ、

ドラえもんは頭が冷えたのか、落ち着きを取り戻した

ス「…まぁまぁ、元はと言えばネズミ如きに星を壊そうとしたドラえもんにも非があるから…」

の「そうですよ、だから許してあげて下さい」

それを聞いたナズーリンは半ば涙目で

ナ「……あ、ありがとう…君達は優しいな……」

余程慧音の頭突きが答えたのか、慧音に怯えながら感謝した

ド「……ごめんなさい」
反省するドラえもん
聖「いえいえ！貴方が謝る事はないですよ、ドラえもんさん」
ド「でも……」
ドラえもんが見た方向には、のび太達がドラえもんを探してるとき、のび太がドラえもんのいる部屋の襖を開けた瞬間、レーザーガンを放って大穴を開けてしまった壁だ
聖「気にしないで下さい、あれぐらい直ぐに直せますから」
ジ「……はぁ、一時はどうなるかと思ったぜ」
ス「ホントだよ…
これじゃ命が幾つあっても足りないよ…」

のび太達は白蓮達と別れ、慧音の寺子屋に向かう
すると

「号外号外ごうが～～～～い!!!」

突如空を飛んでいる黒い翼の少女が、声をあげながら新聞を撒いていた
のび太は舞い落ちてきた新聞に手を取り、読んでみた

の「えーっと、ぶん…えっとなんて書いてるの？」
ス「おい…ちょっと見せてみろ！（バッ）
…【ぶんぶん新聞】？なんだこりゃ」
し「？どうして途中に句読点が付いてるのかしら？」
慧「あぁ、それは【文々。新聞（ぶんぶんまる新聞）】だな
全くあの鴉天狗は…仕事が早いというか…」

ド「僕にも見せて？」
ドラえもんはのび太から新聞を受け取り、軽く見回すと

ド「…！み、みんな！ぼ、僕達が新聞に出てるよ!!」

の「え!?」
ジ「ガハハハハ!!全く俺は人気者だな!!」
ス「読んでみてよ!!」
ド「わかってるよ、ええっと…」

文々。新聞　　○??号

【衝撃!!　里の襲撃を救ったのは子供達!?】

◆月☒日Σ曜日、午前８時過ぎ　　大群の妖怪が人里を襲い、東側の住宅等が壊滅してしまった

本来妖怪は人里を襲うことはあまりない　　襲うと博麗の巫女に退治されてしまうという事から、人里には手を出さないという暗黙のルールになっていたが、今回妖怪は多数の仲間を集め、朝から奇襲をかけるという騎士道精神もヘッタクレもない暴挙に出た

これにより死者は出てはいないものの、２０人以上が重軽傷を負ってしまった

その中に今まで人里を守ってきた寺子屋のご主人、上白沢　慧音氏がなんと不意打ちにより大怪我をしてしまったそうで

偶然近くにいた博麗の巫女が妖怪と対峙、博麗の巫女の力に妖怪はなす術なし…かと思われたが、多勢に無勢　　他の妖怪に気を取られた博麗の巫女は負傷して動かない上白沢　慧音氏に向かっていく妖怪に気付かず、もうダメか……と思われたその時！

ドカーン！と大きな音が出たと思ったら妖怪は吹き飛ばされていました

なんと【空飛ぶ青いタヌキ】がその妖怪を吹き飛ばしたのです！
弾幕が見えないのにも関わらず！
すると後ろから同じく空を飛ぶ子供達の姿が！
彼らの素性は不明ですが、【ゴリラの妖怪に似た男の子】が妖怪に向かって殴りつけると、凄まじい威力とともに吹き飛ばして絶命させ、
【狐、河童を足して二で割ったような男の子】が、道具を使い妖怪の動きを封じ、【可愛らしい女の子】は上白沢　慧音氏の手当てを
そして、博麗の巫女を不意打ちで倒そうと背後から妖怪が爪を突き出して襲いかかろうとした所をなんと１００メートル以上ある場所から弾を撃ち出し、妖怪を倒してしまう【眼鏡の冴えない男の子】
まさに神業!!

この後も妖怪達に向かっていく少年少女＋青狸は素晴らしいコンビネーションを見せて、そして里は平和を取り戻しました!!
傍で見てた私【射命丸　文】も思わず釘付けになってしまいました!!
里を救ってくれたこの子供達に大きな拍手を!!
（そこには妖怪と対峙しているのび太達の写真が貼り付けられている）

ド「……今後この子供達に密着取材を試みるので、お楽しみに！
…だって」
すると男の子３人は少し苦しそうな顔をしていた
ジ「……なんか嬉しいような腹立つような…」
ス「足して割ったような顔なのかな、僕ちゃん…」
の「褒めてるのか貶してるのかわかんないね…」
それを見ていた慧音はのび太達を元気付けた
慧「何を言っているんだ！良かったじゃないか！
新聞の内容がどうであれ、この事件を解決したのは君達じゃないか！

もっと胸を張ってもいいんだぞ？」
そういうと

ジ「へへへ!!そうだな！なんてったって俺様は日本一強い男、ジャイアン様だからな!!」
ス「へへっ！それなら悪い気しないなぁ！
僕ちゃんの自慢話のネタが増えて嬉しい気持ち（ニヤニヤ）」
の「ハハッ、僕だってやれば出来るんだ！」

青狸達（極端だねぇ……）

そして彼らは引き続き寺子屋へと足を運ぶ

寺子屋に着くと、そこには人集りが出来ていた
何事かと思い、のび太は近づくと

「お！新聞に出ていた子供達だぞ！」
「あら！ホントだわ！」「やっと帰ってきたか！」
そこには新聞を見てきた里の住人達だった
慧「おい、みんな落ち着け！何があった!?」
「いや、さっき文屋が新聞くれてだな」
「私達を守ってくれたのがこの写真の子供達ですよね？」
そういって新聞の写真を見せてくる

「それで俺たちはその子達にお礼が言いたくてここに来たんだ」
「まさか手伝ってくれた子が私達の命の恩人とは思わなくてね、改めて礼が言いたいのさ」
そういったのは先程里の復興を手伝ったおじさんとおばさんだった
の「お、お礼なんていらないですよ！」
ジ「困った時はお互い様だからな!!妖怪なんて、この俺様に任せとけ！ガハハハハ!!」
「しかし、俺達は何もしないわけにはいかんよ！
困った時は遠慮なくいってくれ！」
そういうと、ドラえもんはハッと思い出し、おじさん達にこんなお願いをした

「では、この里に【僕達の家】を作ってくれませんか？」

のび太達がここに来た理由は、人の交流と、自分達の住処を探すためだ
自分達には建築の技術はなくて途方に暮れてたところだった
…流石に厳しい場合は穴を掘って無理やり空間を作って生活をするが、あまり使いた

くない手段だ
人らしく、【家】をもって生活をしたい
今はそう思っている
「そんなのお安い御用だ！大きい家作ってやるから待ってな！」
おじさんはやる気満々　　後ろにいるおじさんの部下であろう人達も意気揚々と声があがる
「部屋の間取りとかの意見が聞きたい、どんな家にするかみんなで考えよう」
鉢巻を付けたお兄さんはのび太達に言ってくれた
ス「それなら僕が間取りを決めるよ！」
し「私はデザインを決めるわ！」
スネ夫は早速建築の設計図（簡単に）を書き、しずかはどんな家にするかイメージを浮かべた絵を描いていく
慧「…凄いな、君達は」
の「…え？」
慧「なんと言うか…【強い】」
の「そんな、僕は強くなんかありませんよ」

慧「そうではない、君達は【芯】が強いんだ
私の教え子達よりもずっとな…」
の「……慧音さんの生徒は…えっと、妖怪といるんですか？」
慧「あぁ、妖怪と妖精が」
の「妖精もいるんですか？やっぱり幻想郷って凄いんですね…」
慧「まぁ鬼も幽霊もいるさ……私の教え子の中でとびきり頭が悪い妖精がいるんだいつも手を焼かされてな…」
それって僕よりも…？
僕より頭の悪い人なんてこの世に……あ、多目君がいたなぁ
慧「まぁ頭のいい奴もいるんだが、みんな芯が強く備わってないんだ
のび太達はみんなに無いものを持っているから強いのかもな…」
の「……」
自覚はないが、今まで小さくも壮大な冒険をしてきた
そんな中、心の中の芯が強く育っていったのだろう
普通の小学生が知らない場所で一年くらい家に帰れないと言われたらどうなるか？
そんな事が考えられないぐらいのび太達にとってここは一種の【地獄】なのだ
しかし、のび太達はこの状況をいかに楽しんでいるか、どう乗り越えるか

そう考えていたのだ

仲間がいたのかもしれない　　心強い仲間が

慧（なんだか君達が羨ましく思えてくるよ…）

その後、家が出来るまで慧音さんの家に泊まって寺子屋に顔を出した

慧音さんがいってた頭の悪い妖精は確かにいた

それも僕が引いてしまうほど

ハチャメチャな事があって2週間経った時、おじさんが寺子屋にきて
「おお　君達、遂に家が完成したぞ！」
なんとたった2週間で家が完成したという
しかしこれには秘密があった
「こんなに早くできるとは思わなかったよ
流石ドラえもん君の【道具】だな」
ドラえもんがひみつ道具を使い、お手伝いをしていたのだ
そして、完成したのはなんと

【のび太の家】そのものだった

スネ夫としずかが設計図、デザインを考えてた時、しずかは可愛い感じの家を、スネ夫は大広間やら映画を見る部屋という幻想郷からしたら意味不明なものを考えてた

それを見たドラえもん達は、「僕達も住むことを考えて作ってるの？」

そう言われたスネ夫は「じゃあ何か良い案があるのかよ！」と反発
するとのび太はおもむろに答えたのは「僕の家なんてどうかな…？」と
最初は「なんでお前の家なんだよ」とか「場違いじゃないの？」といっていたが、彼らはよくのび太の家から冒険に出たり、時にはその場所で寝泊まりをした事もある
もしも……もしも帰れない時があるなら…せめて【見慣れた物をここに作ろう】と
その結果、【野比家】にしたのだ　場所は寺子屋の近く
5人なんて楽に住める場所だが、家具等は無い

この家を作るとき、もっとも苦労したのは【2階】だった
人里には2階建ての家は無い
人里の職人は今回初の二階建て建築だったのだ
作り方等はドラえもんがタイムテレビのビデオ機能をつけて、2階建ての家の建築の動画をその職人に見せるというもの
だが流石は職人、一回見ると理解したのか、その後の作業はスムーズに出来たという

の「本当にありがとうございます」
「いや、いいんだ！俺達も貴重な経験が出来たし
それじゃあ俺達は帰るよ　　じゃあな！」
そういうとおじさん達は元の場所へと戻っていった

人里は既に復興していた
本来は１．２ヶ月は掛かるのだが、それもドラえもんの道具のお陰なのだろう
ド「のび太くん、一先ず【お家】に帰ろう？」
の「…うん！みんな！いこう！」
のび太達はわくわくしながら、野比家に入っていった

第８話　外伝＃１　寺子屋

のび太達の家が出来る前の事……

のび太達は家が出来るまで慧音の寺子屋に泊まり、寺子屋で授業を受ける事に

の「うーん……授業かあ…」
慧「なんだ？勉強が嫌いか？」
の「僕、勉強が苦手で…いっつもテストでいい点数が取れないんですよ」

ジ「テストでいっつも０点とるもんな！ハハハ!!」
ス「０点取得回数学年トップだもんな！こんなののび太にしか出来ないよ！」
ジャイアンとスネ夫は笑いながらそう答えるが、慧音の表情はどんどん曇っていく

慧「学年…というのはどういうものなんだ？」
し「？　　寺子屋に学年はないんですか？」
慧「ひとつの教室でいっぺんに教えるからな
学年…というのはなにか分けられるものなのか？」
し「はい　　小学校なら１年生から６年生、中学校なら１年生から３年生っていう感じで歳で分けられるんです
小学生は６歳から１２歳、中学生なら１２歳から１５歳
…という風に」
慧「成る程…
…？　　のび太は今何年生なんだ？」
の「５年生です
ジャイアン達と一緒です」
慧「何!?　　５年生で……はぁ……」

慧音の顔がどんどん苦しくなっていく
無理もない
毎日廊下に立たされて、テストでは0点取得回数が学年トップ
先生にとってはこれ程手にかかる生徒はいないと言っても過言ではない

考えた結果
慧「…よし！確かに手のかかる生徒だと思うが、君を越える生徒もいる
恐らく君の方がマシだと思った方がいいかもな」
ス「え!?のび太を越えるバカがいるんですか!?」
ジ「まじかよ!?よかったな！のび太！」
の「何がよかったの!?」
（……でも僕を越える生徒がいるんだ…会ってみたいな……）
のび太は明日の授業が楽しくなってきた
ド「…慧音さん、良いんですか？
子供とはいえ、外の世界の住人ですよ？」
慧「構わないさ
むしろきて欲しいと思ってた所なんだ

…もちろん君も出てもらうよ？」
ド「え？　　ボ、僕もですか？」
慧「あぁ、君達がいた世界の事について生徒達に話して欲しいんだ
彼らにとっては良い経験になるだろう」
ド「それならわかりました

…ただ、話せない事は話しませんよ？
それでも良ければ」
慧「無論だ　　無理強いはしないよ」

ドラえもんはホッと胸をなで下ろす
いくら幻想郷でも、外の世界の事をベラベラ話すと良くない事が起こってしまう
それはドラえもん自身よくわかっている

もし、過去の住人に未来の事を話すとどうなるか？
未来が変わり、パラレルワールドになってしまう
決まった時代【史実】を変える事は時間犯罪になってしまうからだ
タイムパトロールはそれを防ぐ為に存在する
もしタイムパトロールが何でもかんでも過去の大事件を解決しているのならば、第二次世界大戦、広島、長崎の原爆投下…はなくなっているはずだ
今回は幻想郷という自分達の世界には存在しない場所に来ているが、もし自分達の世界について…もっと言えば２１世紀より未来の事を話すとどうなるか…
元々ここの世界に存在しないドラえもん達が自分達の世界の事を話すと悪影響が出るのではないか

難しく考えるが、しずかはそんなドラえもんに対してこう話した
し「ドラちゃん、大丈夫よ？
例え自分達の世界、未来の事を言ったとしても何も起こらないわ

今までだってそうじゃない」
ド「うん……でも
未来の事件で、過去の人が未来の道具を使って国同士の戦争を起こした事もあるんだ
…」
し「ドラちゃん、忘れてないの？」
ド「え？」
し「ここは【幻想郷】よ？
私達の世界の常識なんて通用しない世界よ？
それに、ここの人達は強い人ばかり
霊夢さんもそうだし、アリスさん、魔理沙さん、命蓮寺の人達も
みんな戦争を起こさないわ
それにドラちゃん
【ここは過去じゃないのよ？】」
ド「…あ！」
ドラえもんは勘違いしていたようだ
古い町並みを見て、タイムスリップしたかのような雰囲気にドラえもんはいつしか幻
想郷ではなく、過去の江戸ぐらいの時代に来ていたと錯覚していたのだ

無理もない　　幻想郷の町並みは古風な感じがするから
それにここは妖怪がでる幻想郷
この世界では過去も未来も関係ないのだ
…恐らくこの幻想郷にはタイムマシンは存在しないだろう
いや、この先タイムマシンというものは出てこないのだろう
その理由はまだ先の話に……

ド「……僕は難しく考え過ぎたようだね
ありがとうしずちゃん」
し「いいの、ドラちゃん
さてと…私、お風呂に入ってくるわ　　慧音さん、お借りしますね」

そうだ、考え過ぎたんだ

そう思っていた

翌日

慧「おはよう、よく眠れたか？」
の「ふぁ～～～……おはようございます、おかげさまでよく眠れましたよ」
ジ「おう！元気１００倍だぜ！」
のび太は欠伸をしながら背伸びして、ジャイアンは目覚めが良かったようだ
しかし、スネ夫は目の下に隈が出来ていた

ス「もう……僕はその元気の所為であまり眠れなかったんだよ…？」
ジ「何だ？スネ夫……文句あるか？」
ス「め、め、滅相もございません!!」

その理由は

ドラえもん達は別室で寝る事にした
流石に女の子と男の子を一緒に寝かせるわけにはいかん
そう言った慧音はしずかと一緒になることに
分けられた結果、
慧音　　しずか
のび太　　ドラえもん
ジャイアン　　スネ夫

まさにテンプレ

いつもの面子と一緒に寝る事に

スネ夫は最初気持ちよく眠っていたが、寝相が悪いジャイアンの寝返りエルボーがスネ夫の腹にクリーンヒットし、悶絶してた所

ジャイアンに押し潰されたり、ジャイアンのでかいイビキによってスネ夫はおちおち眠る事が出来なかったようだ

慧「さて、朝食を済ませたら今日の授業について説明をする

その後、教室に行き生徒達に自己紹介　　私達の授業をしてから、ドラえもんのお話

…という風にするからな

まぁあまり緊張しなくていいからな」

の「……（逆に緊張するんだけどなぁ……）」

彼らの心を逆撫でするかのように話し、慧音は朝食を用意する事に

朝食はご飯、味噌汁　漬物

まさにテンプレ
博麗神社に泊まったときとほぼ同じ朝食だ

ス「…あのー、パンとかはないですよね…？」
慧「すまんが、私達の食卓にはパンは出ないよ
というか、滅多に食べないんだ」
ス「で、ですよね～
…では、いただきます」

朝食が終わり、のび太達は慧音の今回の授業の説明を聞いた

聞くと、４時間授業らしくて、一時限目から順に、国語、算数、社会、屋外授業こうなっていた
因みに社会の授業でドラえもんが先生として出るそうだ

時間が８時に差し掛かろうとした時、のび太達は慧音に連れられて教室に向かう

そこにはもう既に生徒が集まっていた
…少ないが

１０人　　しかも羽が生えた人や獣の耳や尻尾まで生えてる人もいた

のび太達の姿が見えたのか、一人の少女がのび太に向かってきた
のび太は何事かと思い、立ち止まると
？「お前、誰だ？　見た事ない奴だな！」
の「え、えーっと…僕はのび太、よろしくね？」

するとその少女は唐突にこんな質問をしてきた

？「のび太！お前、【最強】か!?」

の「…は？」

第８話　外伝＃２　一時限目国語　そしてラクえもんズ!?

唐突に青い髪の女の子から「お前は最強か?」という謎の問いがきた
のび太は呆然としていると青い髪の女の子の後ろから緑の髪の女の子がきた
？「チルノちゃん何やってるの！その人たち混乱しているじゃない！」
チ「だってこいつどこかで見た事あるようなないような…」
？「あれ?その人たちこの新聞に出てきた人だ！」
チ「あぁ！そうそう、しんぶんに出てきた人だ！」
のび太達は謎のやり取りに立ち尽くしていると緑の髪の女の子から声をかけられた
？「えっと、ごめんなさい！チルノちゃんが迷惑をかけてしまって…」
の「う、ううん！気にしないで」
のび太はそういうとその部屋にいた子供達がどんどん出てきた
？「わはー、人間の子供なのだー」
？「ルーミアダメだよ?食べちゃ」

ル「わかってるのだー」
？「ボクに似てる青いタヌキが…」
？「見て見て！シンに似てる髪型の人がいるよ？
アハハ！シンに似て変な髪型～!!」
シ「うるさいぞ！ノートの癖に生意気だぞ！」
？「……」

情報が多すぎて理解できない

ス「え、えーっと、取り敢えず自己紹介しようよ
誰が誰かわかんないし…」
スネ夫はそういうと、側にいた慧音が
慧「そ、そうだな…それじゃあみんな席について！」
慧音の号令で子供達は席についた
…一人を除いて
チ「おい！そこのメガネ！アタイとしょーぶしろ!!」
……名前すら忘れているこの少女
のび太は半分諦めムードでこう話す
の「僕はのび太、君は？」
そういうと腰に手を当て、踏ん反り返りながら自己紹介した
チ「アタイはチルノ！最強の妖精だ！」

突っ込んだら負けなのか？
するとチルノはのび太に指を指しながらこう言った
チ「おいメガネ!!今からアタイとしょーぶしろ!!
この最強のアタイと戦える事を誇りにおも（ガンッ）ブッ!!」

慧音の頭突きが炸裂した
言う事を聞かず、今から勝負をするなどと勝手な事を言っているチルノに対して制裁を食らわせたのだ
チルノは頭を抑えて少々涙目になっていた
チ「う～……け、慧音!!何するんだ!!」
慧「馬鹿者！初対面の人に向かって失礼だぞ！
それにここで勝負とはどう言う事だ？授業の邪魔をするなら私が相手になろうか？」
チ「う……わ、わかったよ！」
そう言うと、渋々席についた
慧音の頭突きはやはり凄かった

慧「さて…と、この人達は今日から少しの間だけ授業を受ける事になった

仲良くしてやってくれ！
では順に自己紹介を頼む」
の「野比のび太です」
し「源　静香です　　よろしくね」
ス「ボクは骨川　スネ夫だよ」
ジ「俺様は剛田　武だ！　　ジャイアンと呼んでくれ!!」

ド「ボクドラえもん」

慧「…それじゃあ私の教え子の紹介をしよう
それじゃあまず大妖精から」
大「は、はい　　私は大妖精です、チルノちゃんの友達です」
羽が生えた緑の髪の女の子が大妖精
ル「ルーミアなのだー　　よろしくー」

金髪の髪にリボンを付けた少女がルーミア
ミ「ミスティアと言います　よろしくね！」
ピンク色の髪に鳥の羽が生えた少女はミスティア
リ「リグルです　よろしく」
虫の触覚が生えた深緑色の髪の少女がリグル
チ「アタイは最強のチルノ様だ！」
第2のジャイアンを思わせる性格に青髪に氷の羽をもった少女がチルノ
ノ「ボクはノート　よろしくね」
服装は黒ずくめで髪型はのび太そっくり　メガネをしているが黒の四角いメガネだ
フ「私はフィー　妖精です」
髪型はしずかにそっくりだが、来ている服装は大妖精の服装とほぼ同じ
違う所は柄ぐらいのものだ
花を思わせる羽がついている
シ「ボクは白鱗　シン（はくりん）　トカゲ妖怪さ！」
髪型がスネ夫ヘアーと似ている
尖った三本の髪ではなく、一本の髪型で、左目の下、左腕にトカゲの鱗のようなもの

がある
服装は上はのび太と同じ服装だが、下はツナギを履いている
まるで土木工事の作業員をお手伝いする子供のようだった
剛「俺様は鬼の狼波　剛（ろうなみ　つよし）だ　みんなからはキングって言われてるぜ」
ジャイアンのような図体にツノを生やし、みすぼらしい格好をしたのがキング
（発言者を剛とします）

ラ「ボクラクえもん」

ドラえもんと瓜二つではないかと思わせるその姿
見た目からしてわかるが茶色のタヌキ
ドラえもんよりも一回り太っており、大きなお腹が特徴

慧「…終わったな？のび太達は空いてる席についてくれ
それじゃあ授業を始めるか」

一時限目　　国語

慧音からプリントを渡されるその内容はこうだった
一　傍線部の文の成分を答えよ。
①昨日は、吉田君もいっしょに走った。
②この里は、お寺もある。
③博麗神社、それは貧乏巫女の住処だ。
④いそがしいなら、後で連絡をください。
⑤私が昼に食べたのは、牛丼だ。

のび太の目が点になった
ジャイアンは見るなり頭を下げていた

スネ夫としずかは深く考えながら答えを書いている
一方ドラえもんは３０秒で書き終わる

の（う～ん　　こんなのわかるわけないじゃないか！　　なんだよ文の成分って
空気？水？鉄分？
あーーっわかんない!!）
のび太は恐る恐るチルノの方を見ると
スラスラスラ…
の（ええ!!スラスラと書き始めてる！）
…もしのび太が勉強でチルノに負けてしまうとスネ夫だけではなく、寺子屋の子供達にも馬鹿にされてしまう
のび太は足りない頭を叩きながら答えを書いていく

因みに答えは
①修飾語　②主語　③独立語　④接続語　⑤述語
だ

慧「……さて、書き終えたか？
さて、答え合わせと行こうか
まず1番のこの答えわかる人はいるか？」
そう聞くと、チルノが「はい、はい！」と手を大きくあげた
その時のび太は焦る
一問でも答えが合っていたらもうダメだ　　と

慧「お、自信満々じゃないか　　さて、答えは何だ？」

チ「吉田君!!」

みんな「ズコーーッ!!」

一体どういう考え方で「昨日は」の部分に「吉田君」という成分になったのだろうか

予想外の答えにのび太は少し安心した

えっへん!と言わんばかりに鼻を鳴らして勝ちアピールをしているが…

慧「……チルノ、授業が終わったら居残りだ　　いいな?」

チ「…ゑ!?なんでなんで!!」

慧「お前は全く勉強していないじゃないか！
この前の授業で教えたばかりじゃないか！」
チ「忘れた!!」
慧「……はぁ」

慧音が言っていた
「確かに手のかかる生徒だと思うが、君を越える生徒もいる

恐らく君の方がマシだと思った方がいいかもな」

あ、確かに僕より酷いや

一時限目の授業が終わり休み時間、慧音はチルノとのび太のプリントをみながら頭を抱えた

チルノは全問不正解のび太の答えは２問正解

のび太の方がマシ、それにこの問題の授業はのび太達は受けていないから間違えても

想定内だった

だが、1つ問題があった

それはチルノと共通している部分だ

それはプリントに書いている自分の名前だ

さるの

野比のび犬

シ「ねぇ君たちって外来人だよね？」
シンはのび太達に聞いた
の「うんそうだよ」
フ「外来人なのに里を襲った妖怪を圧倒していたなんて凄いわ！
私なんて戦えないし…」
し「それは私もよ

あの時はただ慧音さんの手当てぐらいだったもの」
ラ「それでもだよ
妖怪をみたら逃げるのが普通なのに、君たちは立ち向かった」
ジ「へへっ俺様にかかれば楽勝よ!!」
剛「へっ俺様も腕っ節には自信があるんだぜ！おい、ジャイアンって言ったな？」
ジ「ん？お前は確かキングって言ってたな、なんだ？」
剛「４時限目の屋外授業のとき、俺と手合わせしてくれねぇか？
俺は鬼で喧嘩が好きなんだ　　どうだ？」
ジ「あぁいいぜ！俺も最近暴れ足りねぇんだ！」
大「ちょ、ちょっと！武くん！危ないよ！」
ジ「なんだよ大妖精、大丈夫だって！何せ俺様はガキ大将だからな！
ガハハハハ!!」
高笑いするジャイアン
大妖精が心配するのには理由があった
まず鬼というのは非常に好戦的で身体能力が高い
特に力が強く、子供でも大人を圧倒する程
ましてや大人ではない人間の子供のジャイアンが鬼の剛と喧嘩をすると、大怪我じゃ

済まない
そう思ったからだ
剛「よし！それじゃあ約束な！行っておくが鬼は嘘は嫌いだからな
嘘ついたらメッタメタにしてやる！」
ジ「へへっ俺は嘘はつかねぇ　嘘つきも嫌いだからな！
そっちこそ嘘ついたらギッタギタにしてやるぜ！」

ス「はぁ…全くジャイアンは…」
シ「き、君！その髪型…」
ス「へ？あぁ、この髪型ね…」
のび太達は馬鹿にされるんだなと思っていたら…
シ「凄くかっこいいじゃん！
その尖った３つの頭、イカしてるねぇ！」
あろうことか尖った３本髪型をほめちぎったのだ
ス「そ…そうだろ！　でも君の髪型も中々センスいいじゃん！」
シ「そうだろ？髪を前に出して綺麗なら整えるのがポイントなんだよ」
スネ夫とシンは意気投合した

この後もスネ夫とシンは互いの髪型について話した

ラ「ねぇ、君ってどうして耳ないの？」
ド「!?どうしてボクが昔耳生えてたってわかるの？」
ラ「だって狸には耳がついてるじゃないか
耳がない君は怪我してるとしか見えないよ」
ド「ボクはタヌキじゃない!!
…って本物のタヌキにいってもなぁ～…」
ドラえもんはついに狸に同胞と間違えられてしまった
それほどまでに狸にそっくりだったのだ
の「ドラえもんはネコ型ロボットなんです
耳はちょっとした事故で亡くしちゃって…」
ラ「ネ、ネコ型ロボット!?
君ロボットだったんだ　　凄いなぁ」
ド「君は見たところ狸の妖怪？」
ラ「そうだよ　　ボクは妖怪化け狸さ」
するとラクえもんの隣にいたノートが話しかけてくる

ノ「ラクえもんは色々なものに化けたり相手を化かせたりできるんだよ」
の「へぇ～、そういえばノート君って人間なの？」
ノ「僕は人間じゃないよ　それに妖怪でもない」
の「???」
ノ「えっとね、僕は自分でも正体がわかんないんだよ」
ド「それってどういう意味？」
ノ「昔ラクえもんの師匠に聞いたんだけど、「君は人間でも妖怪でもない正体不明の種族じゃな」っていってたんだ」
正体不明の種族
のび太達にはわからなかった
の「…幽霊でも妖精でも神でもないの？」
ノ「まさか！もし僕が神様なら神力が使えるはずだよ」
ラ「因みに神力っていうのは神様の力っていう意味だよ」
補足説明をラクえもんがした
ド「うーん、気になるけど、僕たちにはわかんないからいいか
それよりもうすぐ授業が始まるよ、席につこう」
そういうとみんな（チルノを除いて）は席についた

第9話　内装がないそうです

中に入ると人里には珍しい構造
人里の職人曰く、この様な作りは珍しいらしい
そりゃ2階建てがない人里には珍しいのかもしれない
（この建築が終わった後、人里に2階建の家ができ始めるのは後の話）
まず玄関のすぐ左にはのび助（のび太のパパ）が使っていた書斎
もちろん内装はないが…
その隣には和室となっており、のび太達がテレビを見る場所となっており、ベランダもついている
その隣に同じ作りになっており、のび助と玉子（のび太のママ）の寝室となっている
玄関に戻って5歩くらい歩いた右には浴室が、その隣にはトイレがある

（洋式トイレは流石に作る事は出来ない様だったので、ドラえもんの道具を使って設置をした　水はひみつ道具【ノビール水道管】のおかげで水洗となっている）

玄関戻り、突き当たりにはキッチンがある

ここでのび太達が食事をする

しかし、内装がまだないので、キッチンとしての性能が果たせるのか…

またまた玄関にもどり、書斎の隣の和室の前には階段があり、上って左に行くとのび太の部屋がある

ス「家ができたのはいいけど、家具は何にもないね…」

ド「今から作っていくんだよ…【ハツメイカー】！」

ドラえもんがポケットから取り出したのは、アンテナが2本付いて長方形の口が特徴の機械
の「！　これっていつかで使った道具じゃないか！」
この道具はドラえもんと喧嘩をして、仲直りする時に使った道具
ただ、仲直りの方法が玉ねぎを使った強制泣き謝りという訳が分からないものだったが…
（ランドセルにマジックハンドをつけ、切った玉ねぎの入ったボウルを用意
使い方は玉ねぎの入ったボウルを持つと、マジックハンドが頭を抑え、玉ねぎの入ったボウルに顔を抑えつけられ、玉ねぎの成分で涙を出させ、マジックハンドが背中を押さえ頭を下げらせるというもの）

ド「じゃあみんな、いま欲しい家具とかをそのマイクに向かって言ってごらん？」
そういうと、スネ夫はマイクに向かって自分に必要な家具を言った
するとハツメイカーの口から紙が出てくる
ハツメイカーはその答えた物の設計図を作り、それを排出するもの
しかも⑨なのび太でもわかるという
ス「出て来たぞ！

…で、どうすればいいの？」
ドラえもんはポケットから工具等を取り出す
ド「この【材料箱】から必要な材料を取って組み立てていくんだ
…木材だと流石に出せないんだけどね」
そういうとその材料箱から釘やらレンチやらでてくる
の「木材…だと、さっきのおじさんに頼んだら大丈夫そうだね
…というかスネ夫!?　なんか豪華すぎじゃない!?」
スネ夫がハツメイカーに言った家具は高級感溢れるものばかり
ブランド物らしいが…庶民には分からない
ジ「よし！じゃあ俺様は…」

次々に言った家具等の設計図を持ち、一同はこの家を作った職人のおじさんのもとに向かう
ド「…さてと、じゃあ僕はキッチンでも作ろうかな?」
ドラえもんは腰を上げ、キッチンに向かっていった

「?木材が欲しいのか?」
の「はい、これから家に必要な家具を作ろうと思って…」
それを聞いたおじさんは耳を疑う
「…え?　つ、作るのか?」
の「はい」
「……」
(この子供達、幾ら何でもしっかりしすぎだろう　何をどうしたらそうなるんだ…!?)
おじさんの頭はこんがらがっている
…小学五年生が1から自分の家の家具を作るといっているのだ

無理もない

ス「…えーっと、おじさん？」

「あ、あぁ、すまん

木材なんだが、他の建築に使っているから在庫がな…」

ジ「ここにはねぇのか…それじゃこれからの木材はどうすんだ？」

「外の木を切って持ち帰るんだよ

…危険だがな」

そういうとおじさんは里の門を見る

木々が生い茂る場所はあるが、そのあたりにも妖怪が出没する場合もある

外に出るだけでも危険なのだ

の「おじさんはいつもどんな感じで取ってきてるんですか？」

「いつもなら妹紅さんに頼んで護衛付きで行くんだ

…今日はいないんだがな」

し「ねぇ、助けてあげましょうよ」
しずかはおじさんの手助けをしたいようだ　しかし…
ス「助けてあげたいって…大人でも危険なのに子供の僕らに手助けなんてできるわけないだろ!?」
ジ「馬鹿だなスネ夫、そんな時の為にドラえもんがいるんだろ?」
ス「そうだけどさぁ…危険には変わらないでしょ?」
の「それでも助けてあげたいよ
僕たちは木材が必要なんだ　おじさん達に頼み過ぎるのはちょっと…」
ス「…はぁ、わかったよ
それなら早く家に帰ろう?」
スネ夫は乗り気ではなかったが、木材補給の為に行動する事に
一同は家に帰っていった

の「ただいまぁ…」
のび太が帰ってくると、ドラえもんがキッチンから出て来た
ド「おかえり、みんな　一応炊事場は完成してるよ」
の「え!?もう!?」
のび太達が家を出てまだ１０分も経ってないのにもかかわらず、水道、コンロ、レンジ等が完成していたのだ
もちろんこれもハツメイカーのお陰
材料は材料箱で済ます事が出来た
ド「…ところで、木材の方はどうだった?」

のび太はこれまでの経緯を話した

ド「……成る程ね、それで僕たちで木材を取りにいくと」
の「そうなんだよ、おじさん達に頼りっぱなしだとなんだか申し訳なくて…」
ド「わかったよ、それじゃあいこっか
でも、危険だから道具は持たせとくから気をつけるんだよ？」
そういうとドラえもんはのび太達に武器となる道具を持たせる

し「ありがとうドラちゃん」
ド「さてと、それじゃあいこっか」
そういうと、ドラえもんは家に鍵をかけ、里の門に向かっていく

の「よくダンゴみたいな手で鍵かけれるね」
ド「ほっとけ」

門に行くや否や、門番のにいさんに注意された
子供が門の外に出てはいけないそうだ
そこでドラえもんがポケットから新聞を取り出し、門番に見せる
門番は目を見開いたが、暫くすると「気をつけるように」といって新聞を返し、元の場所に戻っていった

のび太達は道なりに歩き、森がある場所に向かう

その森はもちろん【魔法の森】
以前アリスに会った場所だ
そこなら多少木を取ってもいいだろうという事でのび太達はそこに向かう

すると、何処かで音楽が聞こえる…

し「？　　ねぇ、みんな
何か聞こえない？」
の「…ホントだ　　音楽かな？」
ジ「よし、行ってみようぜ！」
そういうとのび太達は音が流れてくる方に走り出した

ド「全く…世話が焼けるなぁ…」

♪♪♪♪♪～

三人の少女が楽器を持って演奏をしていた
一人はバイオリン、一人はトランペット、もう一人はキーボード
トランペットを持つ少女は何かに気付いた
？「♪♪～……ん？誰か来たよ？」
？「♪……っと、ホントだ　　子供？」
？「でも何でここに子供が…？」
三人の少女のもとにのび太達はたどり着く
の「ハァハァ…確かこの辺りで聞こえた筈なんだけど…」

？「…えーっと、こんにちは！」
トランペットを持つ少女が声をかける
？「貴方達どうしたの？ここは危ないけど…」
ス「えっと、さっき魔法の森に行こうとしたんだけど、途中で音楽が聞こえて…」
？「…それでここにきたんだね」
の「はい、凄く綺麗な音楽でした」
し「なんだか不思議な音色だったし」
ジ「俺は元気になれたしな！」
？「ありがと！そう言ってくれて嬉しいよ」
キーボードの少女が答える
？「あ、自己紹介がまだだったね
私はリリカ、リリカ・プリズムリバーよ
基本キーボードを担当しているわ」
？「私はメルランよ、よろしくね～」
？「私はルナサよ、私達は姉妹で楽団をしているの
因みに私はバイオリンを担当しているわ」
三姉妹は自己紹介をした

因みに長女がルナサ、次女がメルラン、三女がリリカ　という感じでルナサがこの楽団のリーダーを務めているが、
性格状ルナサよりメルランが目立っており、メルランがリーダーだと勘違いされているのは内緒

ド「おーーい！待ちなよみんな！」
の「あ、ドラえもん！」
ド「全く…あまり離れないでよ、もし何かあったらどうするんだ」
ジ「悪りぃ悪りぃ」
頭をさすって笑いながら謝るジャイアン

三姉妹は目を見開いてドラえもんを見つめる

…まさか

三姉妹「あ、青いタヌキが喋った!!」

ド「誰が青いタヌキじゃい!!ボクはネ《割愛》」

のび太達の自己紹介が終わり…

ス「そういえば、君たち三姉妹はどうしてここで合奏しているの？
ここは危ないんじゃないの？」
し「そうよ、音楽なら他の場所でもできるのに」
すると、三姉妹は意外な事を話す
リ「え？もしかして知らないの？　私達は幽霊なの」
ル「私達は戦えるから大丈夫よ」
メ「それに私達既に死んでるからね～」

みんな「えぇぇぇぇぇぇ!!!」

まさか幽霊だとは思わなかった

というか、ホント幻想郷は不思議でいっぱいなんだ

し「あの～…ルナサさん」
ル「あぁ、しずかさん、呼び捨てでいいわ
というか、さん付けで呼ばれるのはちょっと…」
し「じゃあルナサちゃん！　私、バイオリン習っているんだけど、教えてくれないかしら？」
ル「（ルナサちゃん……まぁいっか）しずかさんバイオリンを習ってるのね、わかったわ
それじゃあどんな感じなのか弾いてみてくれる？」
そういうとルナサは自分のバイオリンをしずかに渡す

嫌な予感がする

三姉妹としずか以外の全員がそう思った

し「ありがとう、それじゃあ弾いてみるね」
そういうと、バイオリンを持ち、構えて弓が弦に触れた瞬間

ギーギーゴーギーゴーゴーギー

凄まじい超音波がのび太達に襲いかかる

音程からすると、【きらきら星】を演奏しているのだろうが、音質が悪すぎてギーギーと音が鳴る
本人は真剣かつ楽しそうに弾いているが…
リ「う……なん…．なのよ、こ…この音…は…」
メ「これ…は凄…いわ…」
リリカとメルランは耳を塞いでいるが、塞いでも超音波の脅威からは逃げることができず、ルナサは…

ル「う……うぷっ」

気持ち悪くなっていた

もちろんのび太達も耳を塞ぎ、倒れる始末

この後、ルナサに弾き方をレクチャーしてもらい別れた後、何故か妖怪（…と小動物）が泡を吹いて倒れて、その後安全に木材を獲得出来たとさ

めでたしめでたし…？

リ「それにしてもあのしずかって女の子凄かったね」
空を飛びながら感想をいうリリカ
ル「……ある意味才能があるわね…」
メ「ね、姉さん、大丈夫??」
若干体調が優れないルナサを気にかける二人
ル「私は大丈夫よ…それより急ぎましょう
【白玉楼】へ」

三姉妹は空に向かってどんどん上っていく

メ「あの子、バイオリンを使った弾幕ごっこしたら最強じゃない？」

ル「やめてくれ…」

？「お嬢様、そろそろ…」

？「……ええ、さぁ始めましょう」

1章　紅霧異変

第10話　紅い霧

野比家の暮らしに慣れて3日がたったある日

し「ねぇ……何か変よ」
しずかは空を見渡す
そこには白い雲ではなく、赤く禍々しい霧が辺りに広がっていた
しかし博麗神社の方角にはまだ完全に出ておらず、今は人里の上空で止まっている
ス「な…なんだよあの霧

黄砂か何かかい？」
ド「だとしても少々赤くすぎないかい？
…こんな時に洗濯物なんて干せないよ」
ドラえもんは洗ったタオル、服を両手で持ちながらそう言った
ジ「あっちの方角から出てるな
…暇だし行ってみるか!!」
そういうとジャイアンは武器を持って外にでる
因みにジャイアンの武器は【空気砲】と【パワー手袋】の２つだ
ス「ジ、ジャイアン!?危ないよ！
もし何かあったら…」
ジ「何だよ、お前は気にならねぇのか？
それにあの霧、太陽を隠しているからなんか薄暗いしこっちは迷惑なんだよ！
ガキ大将は太陽の下で活動するもんなんだよ」
ス「太陽の下……ねぇ……」
の「でも確かに赤い霧の所為で里の人たちはあまり外に出てないし…
心配だよ
僕達で解決できるならやってみようよ、ドラえもん」

ド「う～ん……

……わかったよ
この霧の出所を確認しに行こう」
の「ドラえもん！」
ド「それにしてもみんな、この世界に来てから随分活動的だね」
ジ「だって楽しいんだ　俺たちの世界に無いものもあるしな！」
の「初めて見るものばかりで身体がウズウズしちゃうんだ
それに、ここの人たち優しい人ばかりだから、恩返ししないと」
し「そうね
じゃあみんな、行きましょう」
のび太達は玄関を出て、赤い霧が出て来ている場所へと向かう

ド「のび太くん……」

のび太達はまず湖の方に向かう
そこは以前慧音とラクえもん達と屋外授業をした場所だった
（キャラ説明は第８話外伝＃２を参照）
そこに向かうと赤い霧ではなく、ごく普通の霧で包まれていた

湖に向かえば向かう程、寒さが増していく
ス「ね…ねぇ、なんか寒くなって来てない？」
の「た、確かに…ブルブル…」

のび太の吐息が白くなっているぐらい寒いのだ
季節は冬ではないが……
その原因は湖にいた

大「あ、のび太さん　それにみなさんも」
チ「よし！のび太！アタイとしょーぶしろ！」
チルノ達だった

チルノの能力は【冷気を操る程度の能力】
つまりこの寒さの原因はチルノにあったのだ

ジ「おい⑨（バカ）！お前かこの寒さの原因は！」
チ「！アタイバカじゃないもん！バカはお前だ！デカゴリラ！」
ジ「なにをお！チルノの癖に生意気だ！」
ノ「まぁまぁ…お互いバカなんだからそこまでにして…」

チ&ジ「アタイ（オレ）はバカじゃない（じゃねぇ）!!」

息のあったチルノとジャイアン
笑いながらノートは話を始める
ノ「はいはい、わかったから
それよりのび太達はどうしてここに？
ここに人間はあまり来ないんだけどなぁ」
の「この赤い霧を調べてるんだよ」
ノ「赤い霧？
…あぁ、一昨日発生した赤い霧かぁ」
ス「何か知ってるのか!?」
ノ「知ってる…というわけではないんだけど
【紅魔館】に行った時にそこから赤い霧が出てたような…」
ド「紅魔館？」
フ「この先にあるのよ

案内しましょうか？」
し「いいの？おねがい」
ノ「よし、じゃあいくか！
みんな、ついて来て！」
そういうとノートは先陣を切って先を進む

の「そういえば、どうしてノート達はここに？」
ノ「あれ？行ってなかった？
僕達はここでいつも遊んでいるんだよ」
ジ「俺達でいう空き地か、ここは」
剛「お前らはこの赤い霧を追ってるのか？」

ジ「あぁ、迷惑だからな
そいつをギッタギタにしてくるんだよ」
剛「ガハハハ！面白そうだな！
俺達も混ぜてくれよ」
シ「はぁ……キング
もう忘れたの？」
剛「ああ？なにを」
シ「勇儀さんから何か頼まれてなかったの？」
そういうとキングはハッとして、回れ右して里の方に走っていく
剛「いっけねぇ！すっかり忘れてたぜ！
すまねぇ！約束があるんだった！またな!!」

シ「全く…じゃあ僕も帰らないと」
ス「え？シンもか？」
シ「まぁね　こう見えても僕は忙しいんだよ
今日は人里の方で何件か仕事があるからね
それじゃあ」

そういうとスネ夫は剛と同じ方向へと歩いていった
残ったのはチルノ、大妖精、ラクえもん、ノート、フィーの５名

の「シンの仕事って…何やってるの？」
ノ「まぁ主に土木系かな？
ああ見えて力持ちだからさ」
妖怪は人間よりも力が強く、その中でずば抜けて強いのは【鬼】
その次に【吸血鬼】、そして【トカゲ妖怪】のこの３つになる
更に、トカゲ妖怪は【土木】【建築】【石工事】などの仕事が得意で、度々仕事の依頼が来る
シンもそのうちの一人でもある

ラ「ええっと…それより紅魔館にいこう」
ド「そうだね
じゃあノート君、案内頼むよ」
ノ「任せて！」

―――――――――――――

―一方、博麗神社では…―

霊「……」
魔「おい霊夢、これって…」
霊「…【異変】ね」
魔「よし！それじゃあ解決しにいくか！」
霊「相変わらずね、あんたは」
魔理沙は意気揚々と、そして霊夢は多少苦笑いしながら霧の出所へと向かう

―――――――――――――

一人の少女が苦しそうな顔で考えていた

？「……」

？「…？

お嬢様？如何されましたか？」

？「…嫌な運命を見てしまったわ」

？「！それは一体…」

？「私が子供四人の前で座り込んでいて、あなたが鼻血を出しながら気を失っている運命を……」

？「…はい？」

？「何故なのかしら……

……それより…咲夜　ここにその子供達がくるから丁重にもてなしてあげなさい」

咲「…畏まりました」

咲夜と呼ばれた従者はその場から消え、残されたのは頭をかかえて考えこんでいる少女だけだった

？「屈辱的な……
私を負かす子供とは一体……」

ーーーーーーーーーーーー

たどり着いた場所は真っ赤な館
でかい
スネ夫の家よりもでかかった

ノ「着いた！あれが紅魔館だよ」
の「あれが…」
ジ「なんか目に悪そうな家だな」
ド「…ん？あれは…」
ドラえもんが目にしたのは門の前に立っているチャイナドレスを着た一人の女性
腕を組みながら俯いている

フ「ここの門番さんよ
名前は…美鈴さんだったかしら」
ス「も、門番かぁ…
出来れば穏便に進めたいし…」
そういうとスネ夫は美鈴に向かって話しだした

ス「あ、あのう…
この赤い霧の事で話があるんですけど…」
美「…」

ス「め、美鈴さん？」
美「…」
反応がない

聞こえ無かったのか？
スネ夫はもう一度さっきより大きな事で言う

ス「すみません！この赤い霧について話がありますがよろしいですか！」

美「…」

美鈴はうんともすんとも言わず、俯いたままだ
のび太は近づいて
「あ、あの！聞こえてますか？
僕達は…あ！」
何かに気付いたようだ
ド「ど、どうしたの!?のび太くん！」

のび太は美鈴を指しながらこう言った

の「この人、寝てるよ？」

みんな「…は？」
ス「はぁ!?」

美「ぐぅ…ぐぅ…」
よく聞くと、寝息が聞こえる
そう、美鈴は立ちながら寝ていたのだ
これには昼寝世界記録１位ののび太もびっくり（現在の記録０．９３秒）

ス「え、えぇっと
……どうする？」
ラ「仕方ないから無視して入っちゃう？」
の「流石に出来ないよ
ここで起きるのを待ってあげよう」

？「いいえ、それには及びません」

何処からか、声が聞こえた
その声の主は何処だ？

いた

のび太の目の前に

の「!?」

ス「うわっ!?いつの間に!!」
のび太達は一歩後ろに下がる
ド（い、いつからのび太君の前にいたんだ!?
門は閉まったままだし、あの人が出てくる場所なんて…!）
すると声の主…メイド服を着た女性は美鈴に向かって…
？「良い加減起きなさい!!」シュバッ
サクッ
美「ギャーーー!!!」

一本のナイフが美鈴の額に突き刺さった

し「きゃあ！

あ、あなた何を…」

？「あぁ、心配しなくて大丈夫ですよ

美鈴は妖怪ですからこれくらいじゃ死にません」

ジ「妖怪だったのかよ…

……あんたもか？」

？「いいえ、私は人間です

…申し遅れました　　私はここのメイドを務めます

十六夜　咲夜　と申します」

咲夜と名乗った女性はのび太達にお辞儀をしてきた

の「わわっ、そんなに畏まらないで下さい！

僕達まだ子供ですよ！」
咲「いえ、誰であれお客様はお客様ですから
例え子供であっても対応は変わりませんよ」
の「は、はぁ…」

美「さ、咲夜さぁん……」
すると額にナイフが刺さったままの美鈴が涙目になり咲夜の方を見ていた
美「い、いきなり酷いじゃないですかぁ」
咲「お客様に対して失礼じゃないかしら？美鈴？」
咲夜は爽やかな笑顔でそういうと、美鈴はガクガク震えながら「すみませんでしたぁ!!」と深く頭を下げた
咲「はぁ…
さて、貴方達はレミリアお嬢様より、謁見の許可が出ております」
の「え……えっけん？」
ド「つまり会えるって事だよ」
咲「ではこちらに…」
咲夜はのび太達を紅魔館の中へと連れて行く

ノ「あの、咲夜さん」
咲「あら、ノートさんもいらしてたんですね」
ノ「まあね、それより今日も小悪魔ちゃんの所に行ってもいいかな？」
咲「今日は駄目……と言いたいけれど、同じお連れですから断れません
構いませんが、あまり問題を起こさないで下さい」
ノ「わかってるよ」
そういうとノートは紅魔館に入るや否やのび太達とは別の場所へと向かっていった

咲「お嬢様の部屋はこちらです
…お嬢様、お客様をお迎え致しました」
レ「入りなさい」
咲「失礼します」

そういうと咲夜はドアを開け、のび太達も中へと入る
そこにはサキュバスの様な小さな翼を持った紫色の髪の少女が立っていた

レ「初めまして客人達、私の名前はレミリア・スカーレット
この紅魔館の主人よ」

の「子供…？　ええっと、ここのお嬢様はどちらにいますか？」

レ「……は？」

レミリアは聞く耳を疑った

さっき自己紹介をしたのにも関わらず、のび太から「お嬢様はどこにいる？」と聞かれたのだ

レ「わ、私がそのお嬢様よ」

の「?そのお嬢様の娘さんじゃなくて?」
レ「違うわよ!!」
すると見兼ねた咲夜がのび太に向かって話す

咲「のび太さん、あの方がレミリアお嬢様です」
の「え!?僕達と同じ子供が!?」
レ「子供じゃないわよ!あんた達なんかと違って５００年も生きてる【吸血鬼】なのよ!!」
レミリアは我を忘れ怒り狂う
しかし、はたから見れば子供が駄々をこねている様で可愛らしいものだった
咲「お嬢様、どうかお気を確かに!」
するとレミリアははっとして、表情をかえた
レ「ご、ごほんっ
…私は貴方達人間とは違って高貴な種族【吸血鬼】なの
貴方達よりもずっと歳上よ?」
の「そ、そうですか…(つまり身体は子供で中身が大人…って事かな?)」
レミリアは椅子に座り、のび太達が知りたい事について話す

レ「貴方達、赤い霧を追っているわね」

ド「えぇ　　しかし何故それを…」

レ「私は人の運命を見ることができるの
貴方達がここに来る事もわかっていたわ」

ス「運命……」

ジ「おい、それより俺達は赤い霧について知りたいんだよ
お前は何かしらねぇのか？」

レ「はぁ…　口が悪いわね
ええ、知っているわよ？何故なら

私がその【紅い霧】を出したからよ」

第１１話　紅魔郷

レミリア「ええ、知っているわよ？何故なら

私がその【紅い霧】を出したからよ」

その言葉にドラえもん達は身構える
いきなり元凶にあったのだ
恐る恐るのび太は理由を尋ねる
のび太「…それはどうして？」
レミリア「私達吸血鬼は太陽が苦手でね、ならばその太陽を隠せばいいと思って紅い霧を出したのよ」
静香「あ、そういえば太陽に当たると燃えちゃうって本に書いてたような…」

ジャイアン「そういや豆とか十字架とかも弱いとか言ってたな
なんだよ、苦手な物ばかりじゃねぇか！」
レミリア「それは否定しないわ…
…でもね、もう一つ理由があるのよ」
スネ夫「理由？それは…」

するとレミリアは机に乗り、両手を広げて

レミリア「この幻想郷を支配するためよ！」

途端、ドアがバタンと閉じ、窓にカーテンがかかり部屋は暗くなり、蝋燭に火がともり重々しい雰囲気になる
レミリア（ふっ、決まったわ…！ドアは固く閉ざしておいたから出られない
まぁ子供だから脅かして帰らせるとしましょうか…「【通り抜けフープ】！」…え？」
ドラえもんはポケットから黄色いフープを取り出し、開かないドアに貼り付けた
するとドアに穴が空いた
ドラえもん「さあみんな、早く！」

ドラえもん達はフープをくぐり、部屋から出ようとする
呆気に取られたレミリアは急いでドラえもん達を追いかけようとフープへと突っ込む
レミリア「ま、待ちなさいよ！」
レミリアは最後尾にいたのび太の服の裾をつかもうととするが、のび太がくぐり終えるとフープが消え…

ゴチーーン！

ドアに頭を打ち付けてしまう
しばらく悶絶していたが、

レミリアは激怒した

レミリア「もう許さないわ！生きてここからは出さないから覚悟しなさい!!」

レミリアの叫びは、一人しかいない個室で木霊した…

廊下をドタドタと走るドラえもん達
のび太「は、早く逃げないと！」
ジャイアン「ちっ、みんなが逃げるからつい逃げちまったけどあの子供を倒せば解決したんじゃねぇか？」
ラクえもん「無茶いわないでよ武くん…レミリアさんはとっても強いんだよ」
ドラえもん「そういえばラクえもん達はこの館の事を色々と知ってるみたいだけど、それはなんで？」
フィー「それは後で話しましょう！今はこの館から出ないと！」
チルノ「離せ～！このアタイがあのチビを倒すのに～！」

大妖精「だ、だめだよチルノちゃん！返り討ちに遭うよ！」
スネ夫「ねぇ…誰か一人忘れてない？」
みんな「…あ！　ノート（くん）！」

エントランスまでたどり着いたが、ノートの存在を思い出した
〝彼は【小悪魔】という人物に会いに行くといった〟
もしレミリアがドラえもん達と敵対していたらノートが危ない
のび太「……助けに行こう！見捨てられないよ！」
ジャイアン「流石は心の友よ！よし！ノートの野郎を探しに行くぜ！」
スネ夫「ちょっと待ってよジャイアン、ノートが何処にいるのかわかるのかい？」
ジャイアン「そんなの片っ端から探せばいいじゃねぇか！」
スネ夫「こんなに広いのに!?」
紅魔館は見た目よりも中がとてつもなく広い
例えるなら、小さな物置小屋があったとしよう
ドアを開けて中に入るとそこは体育館並みに広い部屋という外見と中身が比例していないというものだ
フィー「あの、私心当たりがあります！」

ドラえもん「ほ、本当かい！」
フィー「えぇ！こっちです！付いてきてください！」
？「そうはいきません」
走っていった先の床にナイフが刺さる
そのナイフの持ち主はエントランスの２階にいた
のび太「貴方は…咲夜…さん？」
他でもない、先程のび太達を案内してくれた紅魔館のメイド長
十六夜　咲夜だった
咲夜「申し訳ありませんが、貴方達はお嬢様を怒らせた
…故に私は貴方方をこの館から出す事は出来ないのです」
ジャイアン「お、怒らせたって、最初に手を出したのはアイツだろ！」
スネ夫「そ、そうだそうだ！それに僕達は怒らせるような事はしてないぞ！」

ドラえもん達はあの時逃げるのに夢中にドアに鈍く響いた音に気がつかなかったようだ
２階から飛び降り、スマートに着地した後咲夜は少し睨みをきかせてこう言った
咲夜「理由は何であれ、お嬢様はお怒りで

「あの子供達を生け捕りにしなさい！」とのお達しなの
…例え子供でもお嬢様の敵は容赦しないわよ？」
ナイフを構えた咲夜
緊迫の中、ラクえもんが前に出る
ラクえもん「みんな、ここはボクに任せてノートを探しに行って！」
静香「ラクちゃん！ダメよ！一人じゃ危ないわ！」
ドラえもん「そ、そうだよ！ここは逃げないと…」
ラクえもん「ここで誰かが止めないと追いつかれちゃうよ
それにボクは狸妖怪だよ？簡単にはやられないって！」
そういうと手を前に出すと拳大ほどの大きさの木の葉を出す
ラクえもんは鋭い目つきになり、咲夜に対峙する
ジャイアン「…わかった！おい、お前ら行くぞ！」
のび太「ジャ、ジャイアン！」
ジャイアン「ただし！絶対に負けんじゃねぇぞ！
もし負けたら…ギッタギタのメッタメタにしてやるからな！」
ラクえもん「あはは、そうされないように頑張るよ
さぁ、行って！」

ラクえもんの指示に従ってドラえもん達はフィーの先導に従ってノートを探しに走り出す
咲夜「逃がさないわよ！」
咲夜はドラえもん達に向かってナイフを投げようとするが

ラクえもん「幻術【満月の下、狸達の踊り】」
ラクえもんは技のようなものを唱えた
寺子屋で慧音に習ったことがあるからドラえもん達はあれが何かはわかった
【スペルカード】だ
ラクえもんは咲夜と弾幕ごっこをするつもりだ
咲夜はスペルを唱えられ、咄嗟にラクえもんと対峙するが…

ザ…ザ……
急にあたりの景色が変わる
林道のようだ　上を見上げると大きな満月が見える
咲夜「こ、これは一体…！」

急に咲夜の周りに狸が現れ、

ポンッ　　ポンッ

とお腹を叩き、踊り出した
すると叩いた直後木の葉型の弾幕が咲夜を襲った
周りにいた狸が咲夜を囲み、咲夜を中心に回りながら踊り、弾幕を出し続ける
咲夜「くっ！」
咲夜は放たれた弾幕を避けていき、咲夜は銀時計を持ちスペルを唱えた
咲夜「幻世【ザ・ワールド】」
途端狸達の動きが止まった
いや、狸達だけではない
放たれた弾幕すらも止まっていた
〝咲夜の能力は【時を止める程度の能力】〟
そう、咲夜は時を止めたのだ
咲夜はナイフを周りの狸の頭上に出現させる
咲夜は銀時計を構えて

咲夜「……解除！」
すると、
ザクザクッ！
放ったナイフが見事に全ての狸を刺していく
（弾幕ごっこで使うナイフには殺傷能力はありません）
全ての狸を倒すと、周りの景色が変わっていく
先程のエントランスだ
ドラえもん達はもういない
…二人を除いては

ラクえもん「なんで逃げなかったんだよ…」
チルノ「アンタじゃ負けると思ったからよ！
このサイキョーのアタイがいれば勝利は間違いなしよ！」
大妖精「チルノちゃんどうして戻ったの！危ないのに！」

咲夜「やってくれるじゃない…それなら貴方達を倒して彼らを追いかけるまでよ！」

咲夜は右手にナイフ、左手に銀時計を構えた
ラクえもん「ボクだってマミゾウさんの一番弟子、簡単には倒れないよ！」
ラクえもんは木の葉を持ち、周りに木の葉を乗せた狸に出現させる
チルノ「サイキョーのアタイの力を見せてあげる！」
チルノは周りに氷を出現させる
大妖精「もうダメだ…おしまいだぁ…」
大妖精は考えるのをやめた

フィーの先導でたどり着いたのは大きな図書館だった
フィー「ここに小悪魔さんがいます
恐らくここにノートさんは来ている筈です！」

ジャイアン「よくやったぞフィーちゃん！
そんじゃ……（スーッ）

ノートおぉぉ!!出えぇぇて来おぉぉぃ!!!」

途轍も無い声量でジャイアンは大声でノートを呼ぶ
その声の影響か、本棚からいくつか本が落ちていく
近くにいたドラえもん達はその大声で耳がキーンとなる
すると

ノート「う…五月蝿いなぁ、僕はここだよ」
両手で耳を塞いだノートが出てきた

…悪魔のような翼と尻尾が生えた少女も出てきた
同じく耳を塞いだ状態で
？「うぅ～…耳が痛いです…」
ジャイアン「やっと来たか
おいノート、帰るぞ！」
そういうとジャイアンはノートの手を取り引っ張っていく
ノート「ちょ、ちょっと待ってよ！一体どうしたんだよ!?」
スネ夫「どうしたもこうしたもないんだよ！ここのお嬢様から僕達が狙われててそれどころじゃないんだよ！」
ドラえもん「いまラクえもん君が咲夜さんを止めているんだ！」
ノート「ええ？せっかく小悪魔ちゃんのお手伝いをしていたのに…
ごめんね？小悪魔ちゃん」
小悪魔と呼ばれた少女は慌てたように答える
小悪魔「いえいえ！大丈夫ですよ
こちらこそお手伝いありがとうございます」
ジャイアン「挨拶は終わったか？そんじゃ戻るぞ！」
ドラえもん達は来た道を戻ろうとする

？「そうはいかないわ
土符【トリリトンウォール】」

急に土壁が出てきて道が塞がれた

振り返ると寝間着のような服と帽子を被った紫髪の少女がいた

小悪魔「パチュリー様！」
パチュリー「レミィから貴方達を捕らえてきなさいと言われたのよ」
パチュリーと呼ばれた少女はゆっくりと近付いてくる
ジャイアン「くそ！こうなったらあの紫もやし野郎を倒して無理矢理突破してやる！」
パチュリー「初対面なのによくそんなこと言えるわね…
残念だけど貴方達は私を倒せないわ
…魔導を極めた私を舐めないことね」
そういうとパチュリー本を取り出して手をかざして、いつでも唱えられるよう準備を

する

のび太「も、もしかしてこの人魔法使い!?」

静香「す、凄いわ…でも今はそれどころじゃないわ!なんとかしないと…」

するとパチュリーはスペルを唱えた

パチュリー「火符【アグニシャイン】」

ドラえもん達に炎の弾幕が襲う…!